登志南眉具全

三四

共九冊

特別
へ4
8179
2

A4
8179
2

三しゐ物語卷第三

伊勢物語のまきもの中に云年九條のおほとゝのゝ
まへにはりかたうゑおほしたてゝにはにうきをしまきに年比
ふるほどに菊の花さかりなりけるを見てよめる
ひとこと葉ばかりにとゝまれる人ぞなきこゝに
なりにけるとかやいとゝ哀なる事ども
きゝふるにつけてもむかしのことのみ
ゆかしくおもひ出られけるとかや
ある時の四方山の話に
此神ぬしの祖父にあたり給ひし人の
乃らやさいの花を見いづるふりかたの
一きゝ八月ごろ名ちかへりえんぐもれ
ふうろうなどさまざまの名おほかりけるとぞ
こゝに人とあるべきこゝはく寺にやまし
十禅寺と云ひしの僧都物語とぞ

廿五日　鎮守天満宮に奉納とて人々さく
り會催しけるにくじとりぬきけるに題は
梅花契久芳

神垣や松に契りて咲梅乃
いろ香も千世の春もかはらし

人々の歌いとおほかりしを書きて奉りぬ　又の
日しめもち出て

いろく思ひ道しるへなかれはいとまなく
れふもくろし逢坂の関

二日三日あそびありけるに
山科や藤の森の三玉
四の宮河の岸もそひけり

廿八日京もさしいてふたちていちゐ出かりし
あかし

ともなひて来し道送りける
さわらひの年のとけしぬしのねを
こよりの人の心あらさし
うくし

これは都すらしも兄らし富士の根を
仰きて見る送る雲の葉　似雲

同日松本宝浄院に立よりやすらひ見ところとも
に舟にのりて矢橋にいたるとて

名所や波路に見出るゝ舟の
波にうかひてちらはれたま松

此歌守山東門院に宿し又の日栗根山に至
ちくの神珠山知善院に泊まりつ世話に秀賢
なゝとせわまりおこなひをしてちかのそと

り人もいでおたまりしとおんいとあまりとも只今行て
くらてゝふ雅うとたらん法のあり
年毎くさくさくよ年すんぶ
さくに二日とゆう雨降生朝日又宗根山のぼる宿
水年うり雨雨中の花ばかり見くく
降雨も屋敷いとゝ花もまく
さるとそこ江乃ちたしの山年
世ちかゆ知くゆ宗ゆ見わるこうれ宗ゆ雨降を雨ど
りく見ゆうくこうれいかりうしゆふハ
碧石そゞえく松柏生くり山宗ゆえりれし
てされゝゝ不動名ちを安亜ちらつて不動ち
と名づくさくにちあら俗俗田師とゝ人わる
常ふ人ゆ対しゆあり事ゆまを山なり

食ふ（コスマ）ふりてよ所ず事盃後をうつ吋かし扨く
宴へ知と食ふう酒ふ酒ち人のおか投しゆ物ゆ中
ちしちゝめのほどハ人しわやしくしうど
年ゆ乃ゆりをもやゆ今ハ宴人ゆ後して一家ち
少けを一酒にちゆこそりとなん酒ふかく世ち大とこ
ちゝゝ山後師のりとへゆちう奇
宗わゝこうちふ所ちく
ちゆちゆ心よいうふ所ちつけき
松尾山彩隆寺うりて
ゆゆ花ゆ雨ちへそして山ちの
ゆへうゝし花へ入おのうち
笠一同法戸ちり
ちち花ゆ山ゆちゆちハ知彩とも

三月のきさらぎ次

返し

祝もおくきくこそきこえたちめ
花ちるの比れ心ゆるとなれ
為は大臣年を宿をむかし　暗の長明原師この歌
ゆえ　おもひ　深乃長うくしき嬢
孫しついたしの歌を知るしめと詠ぜしと
りかせこのおとをおもひおしい知
嬢孫しつ長うくしふ歌も今
むかれ人乃わとれば乃
二日　廉心りゆ
詠くもんゆ知くまたくつ心
花の春とを春の詠くるるし詠

旨あるくくけとふわくらへむこと
ほうてかくりるる俗語を入始まて位俗人をげよ
りされしついざ心うる詠語るるのりて苔なる
川は魚ごあむいの心ばへ花をめむし
詠まもられるりしを所をとまをん
きれはさるばとてるるべ心ぶるるの
りの茶ぶんるどりるせられ俗を道るべ詠
ほぐるわりりのぼりりうるとれえりして
松の末法まどわるて詠ぐるしとやもに松るを
詠しほ法末末るるく茶ちんず少あるてるる
祝まわるかじ末れ枝を三ツ二人ぐるるぎるまて
末心つるるりるせもと元詠まる乱しるて一ツ乃
枝ゑはまりさんぐゑをのさして見まる茶ぶんをく

風流ちかうもぐこそともよい奥しきれば伝も
ちかう一ちくらがはもちれれほどおこりすてて人四
石乃大ぐちも知てわくくすもるもやくひりあるる人
ふをと雲風にまぐ、ぐるうめて湯ぐかのるるこは
まばらんそれくちりおくろ
しろくわしも波ちえぐぐやい魚ちて茶ぐん
こ流くとまろいおちふりちぐ色の祖ごもまは
世ぐ一ゆりれど邪くく風奥さちくいちんくを
されと心の魚ぐぐ風い川乃ろるまこ珍廉の坂は
田の下まるりあまくこるれきしれまれ打ん
柳楊桃梨はくしじ者の花えもちくめ色く
松乃逼まは風じちりあくあぐちくぐりる珍ち
みれちくこいかつくこ魚ちんやくれりぬとこれ

柳花楊花とふを少ちく
さ風くの花咲心やりく神
柳さちれい流ちりうく

悠見

花ちんちちの乃神とふりやちん
やりれ楊の名ハわりとち者
八日三光流乃桂をりく魚
寺乃名の三ツ雲云りに玉桂
花も世ちく数色色ちくん
十一日此宿に知国時お彩じ
咲るてふふれわちれ珍廉川
八十郷れ波乃魚花ちと者

返

鈴鹿川八十瀬の波のさわがれ
ましゝ我身ハ忘まじし
同日午の時ばかりに日照山圓福寺に詣でゝこゝにま
鵜飼などりのしてはいにし人のくりぬそれにも行
くて杖つき坂日永村といふ所なるすぐるとて
村比分乃日永ば長いはなれぬふそ
しろふあるの杖つきの坂
同前四日市に泊りし東本氏旅やどりの次に我
まかせ歌に鵜川をと詠ぜられしに鵜舟ばかり多し
舟やなりとこしき従ひいれいましし岸このまりて
鵜をはりかなんとめくりしまくりて行きさぎのそ
くれしそ舟一つに鵜を十二づゝ使ひかなりその鵜でと
に及びしこうし一もちづゝ使きく花のゆえ見

ばお有のふてかゝり火たえきえさらんやうふ松さうしたる人
つゝ奥ばえらしなむ引わけて口ならちせ頭とるを川
鮎まるるおつなるらるそこに水て多くさうま横さ渡をとる
のがれまじまうは、おもし免ぐ所に付わましゝのなつ
なきつくてむそばて取れし一すじ縄にならざるさざき
ぬふこんくおりいたてもけとられまじしかつくとる
まさびれうなむ体のすのにくまじ見ゆこと少しは
りのにたかとりれなくりれるをしつちとはばり
まてうばこうむとそ中くとわつくまのにしも
たうつす十二疋ばかりのなかにおそくになるもちるとる
一縄ありものなれ玉一筋をとさ外れ方へぬきひさろ
この人鵜は八筋ましも毎とまとまをとのつう
とくとそてさるもたゝりぬ海の事を見て侍りぬと読り見

仏門ゆゑ生死をはなれ無為をこのむ志しをのべ
命をやしなわんゆゑ祖もなくさしたる
ゑ大小猛火ともせども毛なくさりと
わりて身体ばかりのむしと成て
せとなりて石ぐれやうもちうよりやはらふ所ん移つる人乃
中ふもけうきに出して移わまくうらいうるものも
おなし　沖縄ふたりとも
法華宗西行法師
ほそ法くの中ふも寒くれた松ふとわりしはさ
ゆ我もいとけなき花とき法ほりして奥なまくこうし
ゆ弱の糸乃くりうしうれしくおりひ仏とさ
かこれわしく人も乃なるあはど生ぜむさほり
死をいとふうさきハ法ふたり叶ふ色ハ天命を

ゑり生ハ不生ゆゑ只ゆゑ思ひおわらく事もなわらへし
されは禽獣魚虫の毛ゑハ人乃ものも移をろう成ゆ
ゆ死ぬいとも生ぜむさほりのく見を乃の麝なと
て叶ぐにうう沖さんゆハ右の移ほういうもとゆはさり
以ゆ　ゑうもわゆゑ武門ゆ入ゆおしけん人
逆徒ゆをさ毛ゆ毛ゑ武をうし先んうは千万騎と
幃幕の内乃ものうをゆ為し又物の人ゆ害ぬな
うんに穿し拾ひんを悪魔法の利剣見又一やうな
徒しく人ゆうう事ふも叶ふ色んてれ変化乃奇をぞ
ふもうふにうせんさて移冊の毛ゑ乃ものうくし
又一ゑゆ思いけをまれハ人乃つのまゆいむを
ゆ一ゑゆもけうれうもなへしゑゆむともうう
をほくれハ都ゑ移氣安会生ゑくいゆ縛せう

ぶまことの根本の一ともにぶはけそうほうとと
うぶ勢せしてぶ左のほうに自左もうへ北ぶ家さ
しおぶえうに既ず發動せんと思ふ合毎ぶんぶうど
ぶれらのみを少しも大悟解脱のもしめふりやなり
ちんぶぶけうぶんぶりいしきうを後かし
十三日舟よのりあ奨田へぶうくしもとをぶよつりと
おりしてなぶ海を西ぶうちぶこぶくぶりぶほへ左つ
又信別しぶ船のくくもぶ右ぶまりふなうぶうぶうぶ古
北みぶうも移出れ方ぶしてんやぶうぶほ二ワちちての
わりとしぶ出へしぶ又ぶらやとぶ舟ぶのぶくびし松ぶ毎
長ぶりぶせしとなむまくぶいしぶも後女ぶう
たぶを少しにぶとしぶ又ぶ右ぶ二ぶでくぶぶ出でくぶ私乃
京塙て親京しとぶ西ぶにさもうわくぶけぶ免ぶぶ

めりぶぶうちやうぶれ出きんぶんぶうぶ人移ぶへしぶて宿ぶう
送りこしぶ人ぶ行ぶ立出ぶ多ぶ物をたしぶ物ぶぶ
さぶ西ぶ出ぶとぶうぶにきぶいぶぶ北ぶ舟れぶちぶもぶうぶ
ぶきぶれぶぶ右ぶ左ぶうぶうぶぬぶ二ぶわぶくぶぶも新ぶい
ぶくぶ又ぶ免ぶり叶ぶいぶぶしぶくぶうぶうぶぶて左五中将の
事ましぶはぶうぶうぶひぶ京ぶ
不ぶうむかしぶ出ぶ事て京しぶも
ぶりぶくぶぶうぶぶうぶ波
奨田ぶ神社ぶまぶてぶわぶくぶに二泊宿ぶて十五日ぶ
やぶぶ出ぶく雲風強ぶ乃星ぶびつ尻の濱星浮
明海ぶぶくぶぶて沖ぶ尻ぶぶぶぶ必ぶ行ぶぶぶぶまぶに
三河ぶ出ぶうやぶいぶぶぶいぶ十八日八橋ぶ出ぶ星
寺ぶまぶり右ぶ当ぶしぶ宝和のぶぶぶ開帳

ばかりに中さも和紀てしたしの格ちから少くく
思人わまりやあれん格木は厨子に入置たりさん
くらさて始りはるさ国名ちらかなるゑんのさもなり
奴八し寺ちり志ちべのの松ん名て八格れ法をふ
国づく云ちふ名へまくりあ今りでにいらで今をたく
ま沼一まもちちれたり志れたれ堤の毎ふ一木し松法
り業平の塚とて苦むせ石塔の伝となくふちれ
舟しも苔おゆ元て哀ちれうちと
八橋乃名も打ちちんちくと
いひし云葉の紀なりをハ
やち紀に宿し吉田ま至ち廿日二河乃松原を行
八花の方に至ちあれ云く白雲のゆるゆるもま風
わちまし吹あ志れちうい少きしに法ま

一むちおやしき雲のおれるハし業士れ尻ふやわんと
ゆるやちち奴折しも法ごこ二人馬ふちふさ国にの梨てきハ
このぶろ名ちし去業士さ国れ久くさせけるといし
ぱちこちぐちとれ和といんお奴ーさまとハ何の国を
いへハあ正こんれを見しもちをのやふ志法くうあを
業士れ心なちをと指さしちにられしくめち日二廿八
湖ゆ板へ行のかゆんち志づちに眺望しあ
天地乃こ紀ちりきち雲のよま
おちもちちむふしの白雪
廿日吉田を出くく人ばおしもごさちくの国を邪日肥
ゆち馬金ち乃ちち兵具商樂ゆいちかまて云ハ
くきこちをはくしてちら紀れしく人わまくこ引ひ
ら移くく東西へ行朱しく移ふいきあひ猛れしく道

さりわんをさらに注ちかどをくれて百ふまくこう約を
ゑれハおほいろう男ぞんぢぐハ糸すぢがうそうのさい
て異の下田の左右ふたりかハ文字のやうに云げろを
してみがこなごう袖を肩ちくと頭ハまのうく
ろうたれつ姫紀之丞馬れわ母ふ志くぐし折うろつき
眠法くりハ生跡ふ足りやはうなんされど祝ふり
ろうろも袖をゆうさぐをしてをのうとば爰中まも
ゑれさう事れ殊湯ようれ祝ばゆ上何の道もつハ
とにんうゑ母ちくはうちうつなしううのれくこう
ゑへき汐人泥馬さ母くもそう百一つ抜くうこう
のりを中くも有六十六部の浦汐者西也野袖山伏侍
物へのぬけ糸りのふうハ国くの風俗ぶくれと
ぢ汐ハ雲京れ本法ちりかしらちう母彩女ろうと

ゑきかんはくこしこしたをくうつまたさうこ元し
やくをたづさへたわしーつといきもつ紀汐へぢ猿人の袖ますす
うろるれうつわぢくをこうへうれ母ろう祭ろうぼ鼻ふゑは
ろをてわやめをるの紀中丸法ぐをうたいりくいえれを
多汐うくかふわぐきり又ハ紀母ちのうハ紀志つと
うだをつぶやきわう母へなると猿汐の紙物ろう母母
爰四紀そす彩我猿姿ハやは一笠作の杖麻れう汐
もおふ袋ぐし汐母法くれもをそかくうけ
たり彩鞋うろくわもこうろ打ふし我を業度も
ゆうこつめうくむう人のうり泥ハ安藝也の人ちうう
こハいうをとをりを上母うれハ安藝也の人ちうう
をとをいうう袖に今ちく紀ハ見ハと安右
きう中ちを上と汐をうつまうう多祝わりうあ

心も見もさてこそあんぜ有りわれをさうて郡ふ年久
しくを行ぶられて波茅州をさしてこれ有りとうはは
人来いにきんやうふ見を見ぬ有りと常ふた
ぶしうとかくぶ折ふ参古りこそ忘しうく記ねむうし
うりいふ多ふ多ふ多れしさうて彈琴の家くぶうう
ふ能虎梅竹波まうさ記色くのえりあこうくれ数
なと金銀をちりうえあうぐふ海でゆうしえへ
てううよ座さしくも注ぎくしをも行わなせう
不もれくうハべうりの絵をさまうう〳〵あさま
くう四見に注けても人れいも大方かくのをしあ
ひそえし時を拙いひ多絵わ始うまいもんおく
ゆうしくりの去うる多くいもおはううされとうをこも
汐まにさうのそこに海さいとあくハ誰をさうや

いうりひとうとまうしうるべしさいとにあくもこしれ
一つもつらんと思ふ人のことれたのくうれやかにうくな
して門ふ海をうくうく記事ふうんハ何をこれまことれうんや
おう人ハうりうう記事ふうう人
古三日刈や八海彩世ひるし元父大臣う純々 清水谷
故大納云寅業ひの陣門寄あて和哥をこのうし人
なりされて京師ふ多波親の談のふを欲うう
出うくごこうくのうくをれハいうくくくう多書花を
海ふうはあてり
あうし無ふ世ハ海しあをひも考も
無ふ初まう人れ云の葉
ひうしの別業源ふんとい不の入江り潜のあう
影をうんう多

紙さうしなども恨の涙縁
こうのゝ方にて書しの墨の入にり
ものとやの墨を信きる人にうるさるゆゑにてうけき
きまこと

としわしばもきてないひそかのも
うやの墨のうりそ免乃ふ

或人のお話まされば山寺へ参まさやうにおあを添
てうちハべにりくせばかとしに道ち俄に書
物り風をけしくなりて山子いうくちはらんとあ
ふ不まるをう乃返しまりてうり扱をくれを
うの送り物のれるくたくまに消息をうれく
ふいをへれとう不とのた書ふいとけなきまの家物
ひつうい世意悲れくり見も又人雲子なりと書

ぬり奴宿ふかし　はるおりハ元の家　れを考つうなり盆
と彼の傍まれく不仁まおりまれ面目なれゆのさ
物くいしれとうくりしと侍ふもに返出をうきし
人古語なるうる時ふ面いて人ふ元免されしを
ふ奥ふかしく殊儲なりしゆりうわく
又人考ふれきく毎後書ふ下ふくこの人をさし
もるふくるまいのくりいりむちう北なやくせし
出へ後ち人くも座のはくさとそ海しうちをたち
ちい逆へてもふかさりりされと式れこ考ふのミし
本性まこうくいひをれいさらしいのほとふの人く
あ北をたわるて安ふそむきめるゆをなんとも
いうのふこ考ちのうもてんをうれ　ほしき
やとうくく絵して糸ふへしいうふ海乃林お

りてうされても客の来てを見て祖父ふるゝさ
ゐゆれしきのあの来まふうまれうきめをうゝ
ふく恨をさく母こと又ば呑ひ花をする必くば
御たうてさうハ物へしといひうしてさてうの
まけの日ま物ゆりれ物ふハきゆふしも物
されたゑの毋免ゆやうる孫きふハ絵来れとなりふ
この事くといハれたゝ待ぬこハいなゝ
ちゆうしうけ又ゑ来りていつ彩すのまむい
てもいとゆうん早ふうゝ記録ほのめけとうの
ゆ物せしゆるれふりや祝んしふへつゝ
さ母ふうさおりしもの母の猫めゝとなれて
出られハやうくこれをうへてさてうて記る
ちく生められとてさうんくにむちうちをれた

あゝうそものうちうゝ祝ふもふハ物ゆ来になさ
出ましきうと云ふ出ハさほとなう章ゆも客も漢
産見ばふうい眞ふり見のゝふ況毋ふりもくせ
ばれたう事ゆや免うゝきものうり物ゆも物ゝ
ゝを注ふうさうれりとくんめてふれをにしく
ゆなう産へしうのゝ嫁れ宝へ康を少まて
いしんゆてこもうひ物ゆ祝者の許ゆ一欲やと
梨しにい唐宝行のおく母り毋ゆもかくさ
一一重海て反製の芸麦切ゆのせんとて書ちい
竹也りうや出すへれ物ゆれ今やくと待しふ
さしもゆうを又祝へ毋祖ふうを待いなりやゝわり
てゆうくりて出うく跡のゆうれゆて消うひ活
いうんゆをあうれハこもちふしん人書ふふと後

と涙ぐみてうちまもりにひとしほあちはひをまし
ゆめ面きと云しふこの若麦ぬの外にをかう
しもちと面へなりしなりさきまおてそたちや
公さんとせし時おのの小僧庭へおこほし面俄ふ
まくおうてさうなんの蒜おねおそろふろう
をなくぶひろんと出と客となりておくこうこの
世子やはこの数いろあわやまらせしそそ志うの
ろうちあれむ祝まつとわくこうてよ祝しうまま
祝まろうまてもぜんろ紀面ふ云葉松つあやさんろ
もうやくおうてまいらす面しと云もいまさり
きとゆされしあくさくしの紙云とへそろくこ
りて家ろうもうはゆの少えうやふたまりう
うれしあはゆくろのやしうあいねくてそ

おれうろのもうろまくきゆなうこきこの猫松うちさ
いうくしおのこふのあ面がいて紀ろうん
卯月又日尾州名古屋より沙ふくうんやくり二日又
ろう舟りのう勝う沙ふくして葉名よ名舟中
人おまくこのうおいてふうろうさうし事えもいうれ
すされといつくをもは世ろ娘の一よそと忘ひうをを
屋ふ紀松をとと以欲ふひ知て心ろそこうへつ居
八日夜郭公松少て
少八形松意しふ郭公
又はは屋紀娘のまうに
十五日おうし後俗思とはひ
伊勢より面くてうんと出まつはばよ五ッ二ッをかりなう
しう祝のおはおしくてろくいこしを道の面ふ

咲しきれぬ山ほとゝぎす紙なとをあて伝れをすし
ゆく末をとゝ立るかれもしくとて　　悠見

ほれたさになりやすらん鈴鹿山
ゆり捨出はきゝ乃ふ乃ふを
うらそ見の振乃ふたきうほ八人のゆるゝしを波乃影
ゆきしとゝいしし人書よ波もうりん官家を出て
ゆを八墨染の衣よやつし鈴鹿山うほ世をとゝそよ
ゆりまそゝいふちゝ行我ゆるゝんと詠そゝ出し
ゆ月八ゝ人ゝ長とも毛ゝとし　こも
十六日お可ゆ奥升章ゆ長田八わつまよ
ゆ八ゝこゝらさゝ乃れ八ゝとゝにわて宿すとゆそん
といしにわしもさいゝ今青八海ゆつきゝんとて

人ゝ志ゆそと見乃れ八辞すにちゝ毛ゆゝて宿し
ゆ月ゆ欲悠見とゝとゝ時雨を竹て
爰拠こもに定ゆゝゝ
ほのゝふ竹しやまゆゝまゝ
十七日村田親胤許ゆて菊庄
鵜川　　悠見
さのゝ竹の川乃月新ゝ
鵜舟をゝゝやゝゝし和らん
水鶏　　仗雲
雉ゝ里ゆ毛ゝゝゝ乃れの聲ゝゝ
ゝゝと音涼し　暁のゝゝ
時ふ庭の梢ゝゝ月さし知ゝ法ゝもにゝゝわゝ
つゝおゝゝゝふ折しも時雨二毛ゝ三聲ゝ毛つれ見八

なれと今恋ひうらみてや郭公
我らとむつぶ月よりのらん

あるしやさしく見人ゆえ伝とるふをのつゝ興を
うゐわまにおり回へ見せぶらし欣文て奥
弁事ふうゝり宿泊

十八日長田浦より江きこゆ武
りいしふきふ、ちうるすこゝろ
さしのつゝ八去ゑ屋ちゝ
ぜうちい伝りしゝ
ひ浦つゝとうゐふ裡しゝ十日あまり三日ちのふろう
まふらせちゝりぬさたに回らゝ伝ゝこめまいらせす
てきふゝもあるしゝ浦りなハいく程ゝ祢んゝ見ゆゝ
見るんゝのぶとて歌こゝしをちゝ山人ゝ志て

こめれともさのゝとまりぬ見道しゝ祢ハ立知りて
恋見

只宿のあるしもゝあれ旅祢ゝて
ゆゝふゝ里のあふしもゝ志
十九日四外北御宮ゝ回ゝ
ふをも神ゝ初ゝらんをのはゝ
まことをのゝと只ゝ久せ海
常に俗俗をゝ手也行ゝ事なれハ我ハゝ
ゝなくゝゝ歌ゝ見なるにつけてもゝいその長月
おりんまゝりの欣ゝ
毎回りしゝるゝ
まに見人伝のゝ
て也

廿一日二軒茶屋より舟出してゆけるハ松くろせ村
なとゝいふ小野の古江に舟ゆかせ松江に着して
口号をよみやりてともに盃中のまのなとまてわすれて

よろ浪の久さに忘れて千世も経ん
小野の古江の雲乃下陰

似雲

下りまへくて帰へと云人乃いはれしかとそれをうつし
鈴をとのゑ下しき経たりしの古のまゝく思ひ出ぬる
みや悠見松江の岩井乃ゐハ茶すまて花をとのへさ
ちうたハ今一ッ二ッと思ふまゝもさうれハ梅干やうの
物はありなりといひし時ちよこはかりきの砂糖
称ともいはれしに宿のハいおみれハ貝つきのなとハおかし
してかとめとこの貝小ちて貝しもんともいひくし

此の社より塩竈の明神と申に遷座ハ

神の名にたつや塩竈の夕煙
たゝ流れ奥の浦に志くまて

悠見

宮より浦にいまつ大ところとて以ふ下とゝて一志乃
浦よりみ月にのり今一ッしきとゝふうりに志ハしと毛
つるはゝなれぬれとそいして追風よ玉帆引ぬ遠
時の間に飛ぶ如くして飛鳥よりはやくして我
手一ッ二ッなともはをとれハ舟のうちに鰯とふいを
玄して今ふさうまうろくしそ行くめきてあ
らこのれ名うんまのなりしれと此奥の命れ程なさこ
川と漁父の鈎の糸のたつと信此世の命しさう
けてたまひおりうれつんかふ行く思ひうくうし
淡出くもハ又鈎舟沖によくらいありうたき

ふたつ数さ風ちりられ網をはりて舟をく
ちりくひわけちいさ紀綱りてをひとりてあく
いをとべりーはりべーー人とつれー魚乃はり
はりをしーおりいちりはへーしりこりはめく

舟ををくもきりむわりきた

りくこりはりの名のくをに

大演後の海おー　仏佛海ををくをあつく
北二日はかのちりをちりしのはりてをりふうこ
はりををんをこせいをんりーりくふをををさなり
て富士のしんりもハくをあり紀りく孫八海くを
眼下ま重てをうはさりまおをれ雲とふををりを
一年にはまりおまり枝はりりへを生りを

俳句

はりをりーれ名もおをまま一年乃
雲ハいりせの枝をりへて
さりまの海ををりを時ゆくりなく波風いや吹くさいを
いりをとりりふもりて寄りを女りりをは晴れりりを
かーりをはれりて高もなきめへー
海士人雲さりまの海はれ沖は浪
りりくりりりりま舟をわやりき
はくはりて波もやー雲川まりめ
雲の浦ちりき不りりてちいりりれ紀あふ老翁と童子こ
のりをりりにむりれ海はりをりきをハまかめわりをを
とりをを少て
浦人まむりれ海の名はを人ハ

まかぬあさをとこへてそゝ
ぐ世俗なれ子一点るへよ形こゝ生浦り法紀まで
樫の木をゑつめ丸ハ濱ゝり出ゝ一ハ古こゝ
山乃樫ゝ蓑笠一ツゑ山形猪ゑへり不のゝに
ゝい竹ハ年ゝ小片枝つゝうゝ小ゝ今ふ実をむ
ゝ不とれむ

今ハゝて片枝もゝゝゝゝゝゝ
あゝとゝ一ゝ生めの浦人

舟ゝて国つゝいゝ切ゝ伊社小ゝゝ山ゝ社ハ熊野の
権現を勧請あゝ一霊験とゝいゝほゝ云へて天
をゝゝへ怪松枝を云ゝゝて濱ふのゝ色り毛井ゝ
おちゝゝ滝ハゝゝ波ゝ苦ゝまゝゝ雷をゝゝ
ゝて

いつゝの実ふゝ一て三熊野の
神垣ちゝゝ為の滝はせ
世ゝゝゝ云ゝんとハ内おほいゝゝ末三ツゑ濱へゝゝ
ふゝ切ゝ磯ふゝ云ゝ思ゝゝ湖をさゝ切ゝ
ゝ切ゝゝれゝ切ゝふ舟もゝゝゝゝゝゝゝ
なゝ今もふのゝハ彩乃ゝゝれゝ苦ゝ一ゝゝゝ
ゝゝ長ゝゝ白の濱にゝゝりこのもかれもゝ入つ

悠見

榊麻を踏ゝて、
昌ゝゝ葉ゝ濱にゝる一榊麻の
まゝもゝゝの名ゝ一ゝゝゝゝ
ゝ泳一家つゝにゝんゝゝ麻を袖ゝ一はゝゝゝに
ゑふのゝんゝゝ一時今ふ出ゝゝ梨れ枝をゝゝ
ゝゝ一ゝゝゝてゝゝゝふゝていゝゝゝゝいざ

松の小舟いろ松こゑ遠きかりの声さよふと公孫
いひきれハさらバそこの涙松陰より厨(くりや)ゐるとものせき
せをへそのかとにハりてくりちんりのをとゝいもわをそ
こきをくりき花ゐるずもセ紀ぬ長路泳せし旅(たび)かりを
いつくそとこへ見ハ十六年ぶのハるをよ海くらし
くれ海をもをのくおもとゝいるゐるぬこの
名わるさるさ海ハこの浅ぬまゝものをしーホへハ山ぶを
海松尾九浦にて　似雲

名にしおハ磯ハちるく舟をを
見ぬおの浦のうら色をそらる
見るもるゐめをゐ唐の岩り生ぬ五ハ数さもこるゐ
をきハツ吋をるにしる海ゐとゝさるしさ紀出を
するを波風わくををハ浦に旅泊　悠見

おゝの浦やくこえ来ハしゐ陰なるを
苔さるおほひうき海ゐをそする
月ハ見ぬ海　似雲

涼しゐをハり海をて荒磯の
波をくるをる夜れ夜の月
十三日朝ゐ紀ゐをれすハしに浪をゐるるされハ生の
今海をゐふるゐ紙にいしる浦ゐるいしゐをゐ
名のゐゐのしをて海へるをもを船ハしもゐをんゐ
小海を境のをくるを石ゐるをゐ和のうけさやゐふ
うゐ侍りしををハをををいるゐかゐ
きん岩を海しほるを時も紀ゐ人をゐのをを海しゐ
へ侍りぬ五ハるゐをこゐなるて今ハゐへをさゐ
ゆへ不ゐををゐり見を暑しをいしゐ

ゆせ一はいつらゝまくこあやまりきこゆいしをまこ
をていしごゆく今冬ゝふなゝらさゝ五六ゝわくいしこゝとハ
又字ゝ石鏡と出きれとかくこを作りあゝうゝ四ゝを
海人の弁せし事不思議なりすゝ山浦ゝあゝく
うれたのうまてし蜜小舟こゝくこゝとうてゝ五六ハ
ちていそゝりも作人れと海士人のゝ乙紀を彩色
一つもゝ人ゝにさゝりゝいふりとこゝれたゝ山うゝハさな
へゝゝこていゝと海もゝゝまゝくゝりゝりゝさゝりハいふと
してやといてよゝと作ひしゝ人ゝ石ゝ毎のゝゝれし
こゝうゝしゝ毎蜜蜘くゝり云ゝりハ三ゝもりハゝゝ云と
りゝ六十ゝもやあゝまれをしかづゝ毎ゝゝに白紀
うゝ作くゝゝしゝゝにをゝうゝとゝいちいさ紀なゝ
あゝ蜘くゝゝ作つけ海ゝのそゝれゝとゝ知あゝ作も

つて舟ゝくゝゝはゝくゝゝとゝあくきて云ハしこゝゝ人をを
数さ毎して海の底ゝ入祝ゝあくゝゝゝゝゝゝんゝゝゝ
くゝへゝ毎人引竿ゝとゝ知さし出ゝゝやゝくゝれ
ゝゝゝゝ紀あくゝれて息ゝゝ作くゝ数ゝゝゝゝ
竹四ゝゝゝ知ゝの堂ゝゝ紀なゝ創しゝれを
貝はゝのゝゝゝゝ二人の蜜人ゝ内老ゝゝゝ
水中の自在たゝく魚のゝゝゝ

長山世ゝゝゝ波ゝ中に移
石数魚もゝゝし海士ゝれ云ゝさハ
れゝゝゝゝゝ神もゝゝゝゝ
山長浦ゝ苦やゝ毎ゝゝゝに蜜人ゝゝまくゝ来ゝゝ
ゝ二八物ゝくゝゝゝゝ海底ゝくゝの世ゝれゝ
ゝゝくゝれ知云ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をにこの八月ごろ、はやしきゆもちうれとおこせとして、
奥尾九くにもりの宮あきこあんこ
いくさ、まこて、ろやむ事久し、外まいれるいを
ぬきぐくもんぞ、さ、三不思議なるものハ、その来るや、
をくに形ちまくに祇園の太ちく海ゆよ大れ明珍太き
ものもあまくうのうちくさいとくくに、に添
いてうこにくさにおほもれともおのうめ北をさうに
ん歌ものなし、それ加ごろくくよ守り松首にけ
て海に入そををのくこうくりは船あて竹ち
うくうりし八潮の心綫乃云葉小面にくへちは
人海心赤面うこはをにはまれさえはりちりり
は夜もちちうきゆの下りくくはやうふいとにく
ぬるものおりくけりてこもにいも祇次

古記日未詳ちう磯山松の陰小　天神貴宮拾五代目
よるをちりく時ちり花を待ち小潮くあ東海ぬ曙の
色波ちちに見もこれ波をそうあまもこれ
ま二う潮をこひく左ちく人く弁に見小うちうあなし
云し法潮ぬ板ちうれ、色の上なし、富士もきハ
波上ちうちひて、

伊勢の海やかのふうふ波の上小
面影うにくむうく富士ぬ根

ちうちうちに朝日の出なんとせ一時　悠見

忘れやわ孫さいつ朝日影
潮つうけて旬、物ぬしの孫
志ハ一う花にこもまち面影きうて波のおりてきう
くやいとまもゆしさて富ゆ海う名徳ち蜜人

うのはなせといひし一密夫あるとうしそなりて数
月ちにのはを摺杜ふしてかくりなる社あるくしを社ろ
そんせーやうふして頭ちうせなかを尾れあくうをまてちう
むくはきくあいろいう面おのれをそいてみと
おかーれすのをろうてのをハ巷くわくくはくくたに
して美形なるまを面いをんをくれしさて山海ちう
ちくいそ海ちさを又海くくを海くはくはく
ハ神ゆを波ちをしーあまを小舟ひのまくを面をく
いてをのうさ面くくうれいとちくきまくく
磯の岩陰ちを懐乃うちを風をちをくハ海士のをちを
形くしとれれいはまを人をも松をのをををを波り
ちうしりくつをうれつを面て見松面見松あくくを
てうはきせーつうれをいうをさ面なちを大はくくを小

つをうをいふあうをうハ松路のをうをふにうちを風
をうをいて社ものをは村をはく　惣見
伊勢の海や清き浜をを舟ををく
ををしーつのちりをををうん
をくちうをかをき道松面をちはくはりて吉野をを松
陰ををともにやをちいて　似雲
竹ハをを松吹風に蝉の聲
音可ををおく人面のを松彩
山松をちうて二見立石れ茶屋に志ハーをちりけ
てお松ーむちを宿をを　惣見
卯花乃まを紀をうに
二見の国北路をちの月　似雲
伊勢殿ちうを

神さびて寂おのづからにしむ塔殿
こうちも姫うえ紀本森北本原
三津むらはきこえ濱濱萩をえ彩
秋風やまくこ奴婆をとえ紀あて
涼しさそそく伊物の濱萩
湖合川をとうら二ツ池れかとう観音堂へまいり
宇治はこの又
廿六日出宿はなく物いい岩を毎つ祈んと中潟と
いふかう西ふのう文川をのぼる岩出のあく
をあておうきたの嶋名れハ
一夢ふつ紀毎うう入時雨
いうその山れ名はも忘はく
世界かう菖原神園川はその外村く星くの

西岸はくし卯花垣はしへ行さうり波よりや
なしうえあうて稀はあうふのとうくうたる
河舟のはるそも引よいせと
岩根のつくし岸の卯花
釣の糸といふ糸あそ舟うおりてきこ一社をこへと
舟人に星をうもあうるんといふ寂うう村はくこ
河をひよ岸の上なう社中の道はくて一星なま
りもや毎こう未つうんとおはしをて度金殿一乃
潮谷中のむうはくく
山源こ星をひうふ多寂
うれも毎こはかーう呼なう
出星ちうはこの姫ちうう二三町のぼりて和いい岩
といふ岩を又はあうむ石こも名はくよのぼれ

山寺の夕べ人の面影成を欲うつゝ夢と
云ふもしくわやはた夜事ゆゑ面影ゆゑ
人の姿しをうせもうもも声の匂ひやこゝろ
ちゝはゝさこのわり岩ハ凡丈ゆゑ屏風を立
しやうゝ小ゝ小ゝむゝいおを云傳あり
りゝこしふもゝのゝ小し事
去秋た侍ふもゝりとゝ
こゝろ人はゝ面影ハ岩の夢きゝ
ゝれゝゝもに面影ゆゑ
郭公ゝにゝゝゝ法ゝに
ゝゝ岩の夢ハ面影へて
云の葉ハ人ハゝつゝを者の名ゝ

怨見

あゝむの石和世ゝ少ゝ名
少ゝ小ゝこゝ訪ゝ小ゝ面し
相ゝしのゝゝゝ少ゝ毎ゝくしゝ
面ゝゝゝゝ今ハ名のゝふて
揮ゝむゝひゝゝゝ毎人
云ハゝし奥井氏もお可ゝゝ入りしゝて宇
治の旅宿へ舟面ゝくうゝ世ゝうゝゝうゝ
ゝゝゝ称ゝうゝゝゝ花ゝゝゝくへゝ
松板ゝや生ゝハ紀ハ法れの法ゝ石ゝ無生と
称ゝハゝゝゝゝゝゝ名ゝハゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ宴評へゝゝゝゝゝ岩
板舟ゝゝ田九へ生お可ゝ宿ゝ十八日伊沢花宿
伊雲

いさらやと云うれう西東つるふちに
夜ふけるまでおのの川波　　悠見

夕雲を

かたちの形容新うへたる雲の下あり
形容新うへたる雲の下あり

廿九日　お可を出て云つ坂をこえて道をたどり
卯花おほく咲つゞきけりをとゝ
雲なとも点ぜしたるたてなきん
卯花のこゝかしこに見れば光ふ
ゆけとゆくさやうの時日の明かのゝ宿に出て山路
をゆふ山　うゝ　おうゝしき折しも津りく
鳥のなき紀を過ハ　似雲
ゆうゝ明方の下ゆれ明かのに

おなじもゝかはくの音のこゝ
二日　初瀬の観音へ詣ておうゝなるふも毋夏之雲
うゝれいふ　へまして返し　思ひ出つゝ詠ら
さふ茶屋をえいれ　ふゝふ　詠ふ
まやさしくはらゝ　るせ草あり　くえれた
巌沢を楽して曲桐なるかれて　ちゝ
さうくへて上ゆえ過ハ　木こ枝を毋　八を日
新もりゝ　ゆ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
をめゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
とはゝつ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
いさ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

物潔山入おの陸ハつ紙をて
河辺此番数をくいり
番をそ以出ハむらいの山百本名紙せをを林芽く
としてまたにホうち折もり毎らの色ハたく
番をきうたんやうう番数をたく次
標おを表ふ新ろくうつて数ふな紙数をを一り
番ろろく八文なふ示とを色つ祝をとの陸を守て
ゑり以
三日泊潔の星ハ出くり折辺をて農夫ゑ出やいつ
ことゑひき出ハ見ろんこをの溶さゑく溶りをいへ
をふりろも物ろうろ毎う神折を訪ゑ法を
しゑく示ゑ法きころ古ゑゆをも今返し咲しつ
かをなく三梅の明神ハ詣て

をなるる神のつ乃ろうしわと
あふ毎ハ毎ろうし三をの枝村
三日番武筆一名法山ハ詣て おうく毎ろにきうくしを
りもいやまりつて大職冠乃内神殿毎ろくたふとく
たくせ弱おをひて切ろ樹をいふ西域ろう渡りし
雲樹の真外神社佛閣取くくして十三重塔
をを八たり寺ふきうにして注来れ人の訪たり
物もをへしと排つ他ハいもも掃除なるいかし
毎夕番ゑ北生院ろう笠をうけたり又乃あした
なるしハあつ紙郭公ハ鳴きを守つやとをは三ハ
待ろをしんも去らて人をのく
なをうくうひの山叶香
巳日蓮光院のま称きふて切時に山十をあまり

おほく菩提山へ花ゑくまうて侍るふた一枝の折
きて京師一首おそへ　武蔵小路中納言　行時卿
實法々へ参りしに法返しあつらへられしに
行方なく侍へるつし重れしもや歌首こもて筆信
のわやまりなりし也行たた見うを重侍りし
五日の朝郎公を供まうて
かりそめきに事ハあやめのねをおくる
うちうちひとり移もうつろへ　惣見
同日
ふれくるとなれはし旅の笠枕
事のあやをむすぶのこころを
今ちとせ立出んとすれ陰をは山を菩提の関
の花乃中宿と読しへ侍れ表紙の
はたうれらにるとあるしに命たにかりうなる和なる
ハなとこの時をうちへへきとそこもく杖をこうろ
れもう長寿へ参り花香の宮社へまうて天乃かぐ
山をうやりて　似雲
はう沢の所れたる衣うたて
きてこそほさめたのうくる
花香川たる上四毎紙ほけてつ苗こうれうれて
水うれ面ハ海ありうつうろれ面
あせ侍ひうれもこハ花香川
ありせきうけく早苗こうは
橋寺をおく五條ひくいハ赤ま宿し六日高野山
定光院ま杖をうむ法をとはうこうひて後山
の橋ハうしれ花ハいうくはうんとこもれを

月をやとゝ待つゝ春はこひもせて
ひとりに桜の名をうらむ紀

返し　　徽子

春ふきそよらしうらとそもとゝ桜
うらはゝ云葉は花にあらぬ　　似覃

七日は寺々に弘法大師の御ぞう髪回りを拭ひ
せさせ給ひし時内ひつゝ玉をゝりて作り物語、
仏像宝塔のゝ仏舎利能作生は宝珠をの
外くさ〳〵の物ゝ物なるなり
八日奥院へ参りつゝ斎末長遠をさしはさ
五輪石塔をさゝにはゝるゝ所ちいさき紀古墳ハ
小石の碑ゝ多しゝ所みそ参ひゝゝ所れり古き

そとたなとハ道のゝくりふ小松なりやんを拭き所
多くの五輪塔屋うゝ多くゝ石は玉垣松なのきゝ
笠花表額はうゝ玉垣もおはゝれと黄泉ハ苔昇
のゝりはゝ多くゝ乃一人のゝとゝ見ハ文ゝ
ても彫おゝへき八死は一大事なり道の左に玉川乃ある
しに忘れ面もの四詠石りえゝそゝりはゝて四廟乃
松波渡る信ゝむゝの松といへり仏松を金剛界は三十七尊
は梵字波板はゝに記して玉ゝ玉なんゝし
けゝゝも三十七尊波新宮しゝ面奥院へ参る人なゝさ
多四ゝはゝ物記すの芳ゝ今も年ゝよりゝ
えゝ人面ゝしゝゝれうゝはきて
ゝゝ人面ゝしゝゝれうゝはきて
ゝゝ記なゝに老樹雲をゝりて森ゝ面ゝ
古廟おゝまれさ世給ハ面ゝ

きのふおりこなりしほそのかみ髮ハ昔ながら鏡賢僧正を
のりをうけなりたい御ゆ御ゆ御ゆ御ゆ
しに昔容おかまれさせ給ハさりしかハ
ちりゝこのことゝあてゝおりゝもれさせ給ハ僧正ハ
をさせ給ひさて　勅進の出家濃染ゆ　この人さしー免給
いしゝ法ゝものひおいしー由ー家れハ僧正まかく
もおそろしくもおりてたなれる時髮なりやく
うけ給り伝れをきふしに時廟おまこの二角ゝ
なりうへせを所をそゝ法さもゝ紀やゝ世ゝ神
を忘ほゝをうゝゝ波の僧正ゝ忘ゝこのゝ
世つゝ法祇ゝ法おうまれさせ給ハせん
ゝこゝ大師の市勝ゝ法祇のゝをゝうて
僧正ゝ忘しゝ申させ給ハそのゝ法角ゝ美香な

ゝをゝ角ゝしゝをゝほゝくゝゝ法ゝなりゝそのゝ
始さに紀ゝ白ひのゝかゝ大師北法光のかゝハし
紀ハ名ゝ人の國角ゝ申ゝ祈しゝおん
十一日昔ゝこし名伝ゝ法場をゝほんゝ宿法堂
ゝれゝ寺ゝ人家ゝ法ゝの去史法ゝ角ゝ
ものゝゝゝ時の角れゝりゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
國を建立ゝ彩ゝふこそゝ角ゝ道場佛
ゝ法ゝほゝゝふせゝて
ゝ法人の心往文ゝおそゝしきものゝ
をゝうゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝなゝゝ法ゝ金ゝ罪ゝの心ゝゝゝゝ
ゝ者法ゝ形ゝ角ゝ角ゝ

たけまろ せんつこころ
これ三とせおれ四孫まう
谷を出く外のこ幸まう
てをしえし正えれく
海ろてなや三とせにろう
波宇治の文れえし人も宿もきふ
やふをあまこのろけ
毒れりろとなるこころ
十五日 北夜 花王院小月れ
涼しさも世のあるひ
これハ所にし世夏の秋れ月
十九日 松ふ場とるいを稚し春雲院のこと
うはろ乃ふく出ろ香爐やこのものとろおて見

り毒遠慎れ欲ろ
な紀人表形ろとろれを物ろて
今ろうこのきれをなるれめろ
十五日或俗場まて芸を活ちとあ八て
日ろ海ましておそ真してうむとせし時こめと
竹へしちこの今青れ
春ろろ長れのをん今青ろて
こめいろ孫先床夏れろれ

返し

かな紀我春夏もろ一ろ
こ先とそし春乃あり

又返し

こ先てしもえやはとまん春夏の

こ先

花をわしるる宿れ籬ケ

面白そうにおもふ人もいとまれにぞ見る人はたゞ
一すじ世捨人の意ばかりを思ふとて面白くもなけれども思ふ
書の法師の事ふも老面白ものもあるもあるなり
うを数所ものとそ面白数所河も世捨いとふ事のつゆ
をこの数ものこそれ面白きものなりなりこけふも
うたゝ正に名りまれ世を捨ものなり女も紫にもすす
らえし事いうなりうんと名ふ思ふ思ひ合
ものうた根さし抜ふ思ふ事いとも面白
乃梢ふもひ思ついて志ものもなくて面白やのふしと
色こゝを咲うれるさうしく又彼の一うゝを
折くれ末草葉花ばかりなりうゝ世ものふ似うゝり
ものに面白ものを似乃和さ記二ツ三ツをのうつわうゝも

さび面ものを筒なるゝいはゝうん八冷清意味いとて
紅ものを根さ世ものを抜雲ものうゝ八雲もまゝ根
ものうゝ人しゝとゝいゝされいを長明ものを事和
語ふも先られ面ものものかくいまめゝされ侍者
ふをおほをものを記やふ木不田と少えし時ものハ
あゝとゝ又同し人の言文記ゝ我八六十かゝ五年
云とゝうものを事ものうゝ詠めくしと
うくのさとハ志ばしまづ面白へしおりふ面白
さうむをものくゝ面白ものをうれ中なり彼の坂翁
の馬坂はものを雪花のあるなんとゝしし白し
千業ふなれ又和語ものを梅のかに雪と言ものを雲
せしさ面畫中ふものを数も俗ものすされハさなるものや
のものなるしゝ今ものくゝものも拈花微笑面

昇堂空性悩昇華拠水を一時ふつかもすゆられ
を都てこけうんといへハさ竹へてもかゝ数乃程を数へ
ゆきつくそもそも阿字本不生ハいふとわ
生れをばわにうを生ものひつゝ作くせんまゝ
たゝなら面ゆうゝ法をつき線繪ゆうし意れいわ
しろひやともくゝゆうゝしてこうりなんいさといへも
う面へなうんともうゆゝ面ゆうゝあぜハうき世もわうし人
をもゝくハ一結者も孔しと老さひたう弩して
志のをやふうたいもこ面の字をめつうゆくうて
おつきれうゝ風ふ又風ふ又
ゆ重月朝日門至のまゝ称ゆうゝ寶性院元年ゝ
寺ハむかし宿牧後拾遺ゆまゝ好ひし西ゆゝ後拾
後圓融院の御時御法乃灌頂ゆおこうゝ

宿牧

そもそも遷宮の時御制長り
ゆゆ面へき法ハゆゝもゆゆうなよ
うゝ心ゆの花乃ゝ面

御遷

まゝ花の志ゝ面ゆうゝ
法わ数御代を祈ゆゝ
ゆ誤てなれりゆゝ人ハゆ法兼備ゆ祈ゆ法式の中興
ともいうて以面き人なうゝ法を寺くうて
まゝ一ゆを面つて面の茅ゆゝ面きゝひゆを
ゆ数人面ひうゝいたうまいくせくゆ白ゆ一片を
ゆゆ人ゆ面ゆの茅ゆ人にうゝさせ法へうと
面送りきれを
こう面ゆハんれうものゝくれ茅

海の面をこそもこのうち
やさしき方をそ波の一片をもなほさへなく唯識
を学ぶおもひ又或時悲嘆雲のごとくつ来宝の門を
つたふ涙さしぐしにうるおいまくも
再生明神天女の降臨をうけて寶冠ぬいくうを
ぬいだ所のふる魚恨の燈籠をさうけおいしまして
歩雅楽の調子一つ舞衣の曲をうたてさせぬひて
暗はまきこもるこの形うるはしく
なぜうけ面を法のとりて大
学面をとれ法楽めてそ新うさせ新しきを
さうぼほとの人形りしこのいうろややまひうろや
まれ新しきん新りるのそうて七顔八倒し新いし
時をどうるへうるに面えうくやたりしきん年ほの大

徳ぬうこうるさ面ろいうくうまいくうろと志はめさせ新い
祈といおれれを時
ろ祈ろいもおろおるへいたれ基弱の
法乃法をいろおるへ人をし新
学新しぬうそのもうこ新面うりめとなんわうくう
来事ともうさ出ぬ人ろややいうろいの外な新
新りさ面をおりの面きこうおれる名熟のうちよ
新ぬ不めもしつ面しぬ新しき陰流をも志めく
そーるるおるへうすす外相と面ふとも元ろつ意
三日真言壇意住法師のさ面ーー新ぬといふ
そのくれを雅ぬ新人芸ふなくせとせいくう空宝
とおりて衆のれ風ぬトのぬきくうも衰れ賀
世祈をぬやせり

むせひ入り岩ほ高みのも衣都り
ぬしなくわ房のおくことハ
此寺は霊山乃うちなる寺くはさる高ゟ十町
ちこひ山を號て西律院より一大宗圓通律寺と名
はくは此寺のうし谷乃下は蜂羽坂十町ばかり
わけて行きてし房のおりさ後とくゝ方丈に
無きもらくにつや新まきらしく杉のちから
竹の二扉杉の皮ましたるとりく何事をとみえ八ゑ
南面され西南やりとさらしおり志ききことし也
且たさせのこたへりの新れ下やりこ一小そひて云ん
かし此中八一丈ちかりはくりいくせり見をおはへ
出れハ皮ちかし浅く志め池水をのそく月は
ころりも新眼をさらへ去月ここあまくハ納涼の

ためおらし志記このここへ示弁と志まりくはつかのつく
みそ出ひ後ハせしつくちころ乢わら棚は志ろくへり
ゑんかしむきに窓をとこ西へ此二ばかのもとつく小ゑ
志くつくえ脇お春やかみしとされりら見登や
国ひかん西りえんあらしく常よ出入のたちとし
房のなそのもにい語り一つおたらひて杉を志らく指
さし入ゑりきそてられハ炭つま木たとあくハち
ちらくまのわくりを以てし亡ぬとこころかして松杉
捨その外諸木枝をかるらし流れ澤濱とらしく
おまられきり出り見小柴捨成まくし漬守れ
涉社にまりし法る道樵父のことひちらすぬなり
又みるり小徑をそうりて汀まのそめハ雲ろ根をの
つくりあらのぬ法ちまにて池此ろへ示ろくこの西出ろ

おく是に座しつゝ金八魚のわたゝふをえらゝ
用れゝうゝ紙のてわゝ擔さゝをうゝす
茂きうゝさうゝまゝり前に人れ寄ゝひなゝして
毎く蓮乃ひく紀又八伐木丁く毎のく寂寞益
塵閑居に巻きまくゝ紀而目うえんにおりゝ毎紀罪
の母ゝくゝゝ乃者のさえはゝうゝさゝゝゝるゝゝ
さゝ流ゝくゝさむこゝとハおゝくゝしゝゝゝとゝふゝしへれ
世捨人のゝいきん事ゝまゝ毎ゝ只ゝれてさゝ流ず
毎ゝかゝしゝく律師にゝゝゝ紀ゝ祈ゝひ伐ゝ毎ゝ毎
紙ゝゝしゝ也ゝさゝゝゝゝて同七日に我祖度ゝ八祝香
炉脇息等唐集土瓶一ツ飯籠一ツ水汲桶ごゝし
火れ具ゝ外衣食ゝゝく毎ゝゝ毎ゝゝれゝさゝゝれゝ紀
の物に菓ゝれ袋一ツ二ツ毎ゝゝ毎ゝゝゝゝゝゝ

うゝ毎てやゝゝゝゝゝ入ゝん法乃道
ゝゝ毎のゝゝく墨深れ神
ゝ唐れ名伐幻伐彩ゝゝゝゝゝゝ徒ゝ
ゝ乃へて世ゝ名ゝゝにゝゝれ幻乃
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
野廉庭に別ゝ毎宗ゝ入我ゝの水窮戸乃ゝゝ毎
き嶮のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月清く限ゝ
やゝゝゝゝゝゝ麦形紀伐家なゝ十日我金剛頂院
ゝ紀ゝれ月ゝゝゝて
明やゝ紀ゝのゝ麦ゝゝ月乃
紀ゝゝれゝゝ梅れ池ゝ
十六夜茅唐ゝゝ毎巌の峰を分て
彩ちゝゝ樹立ゝ乃さゝゝきゝ

月にさしいるなむさくひの夢

十一日の秋夕立れ後
かきくもりふる雨のあとも今
枕に露のしく夕立乃あと

十二日定光院激雲老阿闍梨より文の奥に
入るをもむかしの枕のたくれ奥山を
いくえの雲乃悩みぬらん

返し
かしこ山浅茅の雲をかきても
わくきくつしむかしもなし

十三日比おもひもせず飯ニ弟ちりしこの八人
はらん宿残しつれさと彼はへいそき帰りてつるに
おもしのけしきもくれ五六歳ほきに来てなれ

うちとけてさやかなおりいさ家にともりしまく
主君姪にさこのはおさいし折々のおごるしきかよち
にくらしの毒つれし幸くの入れ乃さて此も名おお
なく施さく志めやこの折る青月れ為すく外にも老僧を
とりまきせり法ともにのちえののかしれのくふこころ
なさくわらく般若湯をまさりぬくらうなく
みくらふさ夜仰とろうふかむらしねくろめきて哀
ぬりし けわらし つもつやしき人やそむむろし
とりなくし此友乃詩歌れゐくひまく六うろそめ
まうれうろそし みたふもうおやすまそにして常
におもするかべき うしまをしくのさいはるさまき
くりしてさとる歌の友と名つけて都れ京の
うく乾淋し北有乃われし はいほも似とおそなき人の

人々世のさまに志のこゝろざしまれなるして、
老れは遠くなれば友とも絶へ、ことになん世間の
物うらやましけれど衰形の事の侍り紀貫之の
ものもなさしめられとそのゝ侍ひまに或人の所
にのゝくその道貫は世心おさめむとそしての
ほりし若不動坂の法くらおゝ二ツ三ツのわりて
志たしいたるやむきをらいめてはわに息ハ面へに
けりとおかのりのさゝ海をおりしたの形に寄をう
りもしかるものの方は面へえむとハうりてもおも
とさうなんかゝやけいさうれうち今月の中に又
うれを云とそ人ふいるれむもゝすされを
ゝ友ある日うおを行ゝ山とあいつらも欲ぬう
して拙ゝ孫やふ入ぬ先には法面ゝわゝう

或時洛西へ出んとて、うんやゝ川のわくらはるゝ時む
うゝらゝ志ゝきさゝそくして男女むれくゝ彩をそ
三ツ四ツをゝれもゝ日へ八ゝ孫ゝ返しゝ家ゝもこゝろ人ゝ
孫ゝや夕の所ゝ世と今ゝ月ゝ
児童の語なゝ先そまきいとに合云法とゝ絵
その時八猶ふつとゝ人ゝ山とゝ時うつりさとされさし
もおりゝたきゝられ人の志り新ふして志ゝ彩
うゝすゝ志ゝ彩ゝひわゝとゝ
閑居無事にして世の中のりさ海をゝゝうふわゝ
つゝ彩ゝけ立欲法陽和合ゝおゝりて富歌音楽
此ゝひまて皆ゝとゝうにゝ
おゝゝ和ゝ形ふ姉嫁なりゝ情ゝ新詠ゝ姉ゝ先し
嫁をいゝ新ふゝれ詠ゝとゝ先ゝ雲悩ゝは

ゐれたり所いふ紀人につ
うなるく人ゐり又うたもしを
はやくうに何となく折らるる
見ばこうにおとうてい
いつまをうとせんまを
ちうふてなれもてはまし
うれんんやさ紀言はなる
へしされを法一ん
ふさはうちにいてをれ
うを梅う香ば桜ふうを
それおきつ紀を
のゐまうふ姿をえうむう
と免関守れうちゐう云はを

ゐ紀人やさしうをあいきよ
をしをれてもつさし
るうつを言ゐ人ゐう
ゐつまをわ
くれすまを人ぶん
にぶとはし紀事ゐ
にいとをを
ふわち
人ゐまうにもあう
柳にさせ一つ北て
おさに琴を琴
ゐ玉章ゐをを
ふ神の

涙を世紀くし岩ひを富士の煙ゐをを巻木の
千つゐ志ちれをしゐ紀れくの紀すゐちにををてさく
れをうをしわゐ時ハ雲ゐ舟ゐはて物淋ゐ彩を
ゐ雲れをくてにんばくはし月ゐ
ま紀ゐれちまく秋の庵ゐ
ゐのゐ香ば
ゐ雲ゐ
ふも波や紀ゐんとゐくゐて
世にすをゐをおつはのゐくゐ
紀ふなを見ゐを色ゐを
文ゐゐ世人のゐゐを庵帰
おはゐば紀れはし
ゐ色免しをれ千
ゐにくゐてハ所のをちゐ

ゐ

えりこにちそくはをめくどもおかぬ事ぬこ志りてく
こそすて家おもひ出すらむえ無より枕をおしくへ海
元蝶のむれし姫のひ人は小さらしだれ花とくそ
うき名を世にちらしちまくにうくきれなど近
らの身とひ数を志らにけ欲情をおいては人はからぬの
ぬくまむふりのはおしし為きてこりのはて其自然
の時ぬきかしうちにりうかいそにおくうおく康の
書氣をさめの薬にふすてわ小たりあすろしを
程の如き人はさしもけつすれ人は無くはたとれく色
欲ひらすやむ時なし 色をたのしみ乃つ紀りつし
もてく何れ差この女房のまれすす小也にありしこ
がうけ先ん人は身を亡けりし志いてすいのめは筋骨無き
血肉脱し放られ氣もぬきそ終に命をもうし
かりなり

ともうたは海はおかうまれいはしをおかや内へきよさはす
のこされとも世へ住む人の断魚きこすふしもけうされは
身おかのえりこそそれからやのめん程みは乃ぬべきす
たり又志て娘に色志らぬ人は仏生前どにして
物の哀も知らざへし 恵志といへしも色欲ありとのこ
ふか人ありさまたきおわし 嵯峨院に在る乃
月お志くは宮の梅に鳴ぬ物志ら人をとこあらの橋
にも世そのこをあへ皆是色恵のわさすやふ吹のい
こゑはたこ志のい草れらくれ女房より我はく女房紀
風にうちむちまりくらはれふき松虫にまても恋
乃のの恋情すくことをわかつせりされとも情非情
家にくうしても海みれしもとに寄ちなん
人たる恋の心をもたずして詠しいてまんへや

おりたち、云の葉もなかりしかたくの
のつゝ若も若ちすゝ若も如なりすゝ若如不
二本来乃面目をこひ又ハ佛祖恵慕せんまハ志し
かゝ教さとをきゝ仁信者も琵琶八つわゝ面
ハ一切おちゝ樂志ゝさゝん所ハも志ゝ〳〵もの也
如ゝ〳〵もち成面ゝ元ゝくさして妙人のゝ志ゝうゝ
うたゝえ面てゝもゝきこて曉めさむゝおゝしもおゝと猶
ゝもとのつゝきうゝとともと形ん面ゝ月ハ次の蝉
の一琴にうゝひて迷情乃感ゝきうゝ形ゝうゝ

廿七日釋迦文院ゝて大師の御筆ハ自化のまて
面の池乃得ハ絵の大者乃一世ハ法ゝ形ゝ級
ゝ形ゝ和しなゝふ文章含ゝをつゝ孫筆
碧能地ゝこゝ斎形ゝふ妙なゝふ日日金剛三

昧院ゝ面ゝて寶物拾ゝなゝふうたしけ形ゝ
綸旨院宣次ゝ当氏ゝ家歴代世寺〳〵示願ゝ
ゝ面ゝ面所寄附状数者ハ判ゝ又柿ハ末の鏡
字ハ拾ゝなゝ古ハ甲斐国やきうゝの形
金器ゝ山の内和宝寺とゝ形ゝ柿の末ハ乃形ゝ
ゝとゝきに人形ゝて見をきうゝてゝられゝ面ゝ
金界の大日ハ種子大師の御手法ゝてゝおゝやふ
ゝうゝれゝさゝ者ゝ見をおゝく見をゝ行ゝふゝて
ゝくゝきゝ仁ゝ所ゝふゝ

形ゝ年とゝて洲記をゝその形ゝさゝうゝ汐範と
ゝうゝ後絵文ゝて後京拾拾改良経公御深手
の巻ゝおゝて一神ハ拾ゝ面ゝ添ゝ七宝をちりゝ免ゝ堪
条やゝの筆ゝあゝさゝて錦袋をゝ加ゝえりゝの

額とも記にくもし
松花堂書画の屏風あり飛鳥井雅経長明兼好なと
外にも多くひれ欲しけれなきのたまふ来るよしを書しるし
にうつさるゝ筆の外にも神ありて情きハ更に
なし心ゆく讃心ありまことに兵たらんにつけても其
力とのつ孫につたへ紀念しなりしたふとき事かな
外にも霊宝ありまして伝りし
十八日南院に参りて不動尊を拝しまつる
に火光あらく尊容の御厨子の内にうつせるを此
其をといふはされと大師一刀三礼の御作恵果阿
闍梨の開眼ありさせ給ひ大師御帰朝の時海路風
波あれて御舟あやうかりしに此明王異験まし
くて法縁を忘れさせ給ひし其世に波切

の不動尊と申ならはしたるそのかみ火光八九尺にのほりし
並給ひて今宮にたてしとそ又ハ首蒙古数万の賊
船をそろへて筑紫のたゝかひをせしめし時此威力に
て海つゝみ一時に不の□変して忽凶徒ことく九
滅亡せりとて異国退治の不動尊ともこの頃へ申と
なんくもしくは此御の縁起にみえたり
志つらに渓辺に庵して坊のおのおのに岩ありてゆき
かよふ者は玉をそろへて数多すおほい成ある
ちいさきもしきも給ひあり志はし消やらてお
これにしくこのふるさと思ひ合されハ世の事を目の前に
同し大家ある貴き小家卑賤を子世と生
まさ
ゆきかへり岩間にさゝふ水の泡乃

済みたりても我往れ無やく
虻(アブ)といふ虫が家に来るとも喰せんなどあふてやくも
来れど障子いつまでさしし紙にてかしら打ち
きしきりにはらもちて道しなさずありて力を
まけしてかなしくとすれバつかれしやうやくさましく
開くいたされどころかくはたらくさへハ出やしてや
来てめてつまびらかにさかりし時るとふにその力ば往れ
家にまかりてそのあるくらに済りまするひ属てらう
をのこりてもある事なる見をとみてまいとに虫といふ
あるこれとてもおぼらつたなるのうおもと家さおすい
無我のばこ入りんなふに何なのそすれしの用しき往
にはんなかもなしくまさやふまさてまんといひ
まけむも(ゑ)へにきてもくやたりなとまさもちるれ

くへつばおもむけ気をころしおのれがはかりやし年月
ばむなしくて蛾のおほひのきこんをまもらんへの文字おぼきて
つとにおほ後左右をおもひめぐらし済らせハ中くなくとも
道もさへぬ道理しおきさ方へゆかんとするに
此虫ハ何ぞたいとたまらん
蛾といふ虫ハ燈火をむさふて蛾きをえらび往り時は灯
火の明るき座にとひて蠟一ツかの内をうかゞふ我身も
くるしくてめぐりやむ時なし まよひ志も蠟
れごとおもふ虫にひきよせ火にいらんとせしを何く遁と蛾
せしきれど済ありて浄に無くもぬ見
におもふお人見ハ云としく 蠟れつゐにさうかすも
とおりてめと却て語へたりむもしつくまにおおしき事
あんくにし人いつれ此道にも心さし 済れせんなる

にをいてをなれくさき市をもけりてをげまをはいをそおも
ふさうひりをへ面ぎさされをとをぬまりつ面のくこび
ゐてこの世の姿み入泥りあるる面ひあるれを
面くいさくうも心眼の到らけさうんわとハ我も人をいつ玉を
の見をしいつ玉をる北をん
問ふる為るるるをハ為川うの為るかこ玉このをそもちをれ
世中国まいをにもひるつくくだ一面てまるれをさるを
をへ玉こうる彩源公遠谷み形こを泊れ意馬心猿い
うハをくぶされをはをくるりをひるる人るをれをうれ
しふ事もなくうれしくるるいうれるさて流もなし
云をれこの仏法外み信仰りしかを人をちる紀みりの
をれハ為ひうくうれるむうひて為ハしいるしみ
ひりを我乃為小衣を央のはきしるる見をりけ

さむとをれを問ふるを為てさるに消やるををの時為
中小為ひるるしををふ代弟に似わハるしみハ人み対
している玉る見則んるる北小生しいるを北火るありとい
を為るるく佛をむひをるるうさんけのおるひなをしを玉ハ
を火面ちをまるきゆるとるんを為を伝なくさみを紀
ひるて涙をなるるしるみを為るるくるひわをする
にいるほををるるしき物なし万為万沙の功徳
をもけのをふやき和ほしを地獄の猛火乃
たをこもるをなんを見也をるを為ひきをやしるる
一生いる形為みゆふもいるるしを為ひ今年振り
の祝もをれくをハ人れ四をる我をむるひゆるるく
みるをあるるしを時ハ四るるをれやるあもわるるきこれを
て為ふをるるせをハ又るやるるにるいるを北生るる

ことゝはなりぬれば、さいをさうへ、あるもなし、人もむ
なしこれすなわちいろの世界にして世のさかりなるべき女の
みをかくるゝ涙ばかりしら人もあれかしに世外の家なり
自他をあつかふ法ますきさいとにたるむ

我あるいてをれをこなうゆめの農夫うしかはなる一面こ
馬小姓まれ宝あるくしてうきさひをとひやかいはまま
面にうく郎うに見てつのうまの兵術未熟にして面
きしを求め上ニ酒にれまるくあるひ米粗とゝ数
をたくさん国おいとに心ゆれハ法義を指しんまうを
法花ゝ法ゝ苦をおいにむすへハ心らくしくあ
ばなし頑さむきへも息絶てあもまれ死を物を
面ゝうちいさ面さうへきうるハ風あをうまいうしあ動て
風ばなを面の風うく火を火を

消を一面小志て要をうをを同しうばたく心のうを
くハをを弁せんとまうにさうゝ語るし
はうの風をあをにうもうあをはほをて面けハひ
やくうれハばあるきて面けあるこうなるくあるハ
をしくたのうをたるをうるうるうるうるうるを
ちるれ用ひまうて冷暖かるるを物を面く一様乃
看をなをへうす
我を面のうて分れ害をたくさうるうるうるうるし年
動だのうをれをそのうて二小をれ情報斧を
面のうく隆車にたれ昭子たのはをばなあのうて胡地
おりむき孟獲和謀を面のうくさうるうること乃皆
これ自ばあのうて他をしくさうるうるかきうるる
きこ天地ものをまくきうをまうるしいをを我をして面た

うぬぼれやうへていえる自慢なる皆此なきこの自慢
の本をおせはうつはあのせもいまへうる多くの人は無我に
しれなりまれし急ゝたとひ世上一人の秀才も徳
をうるたりといふとも自分のうすのこゝろんそ他をあるな
こゝろんある外の藝術ならず人いふ不勉しく器老となるも
その名の於けるハなし残すハこのましうるを知とす
みてにおしまておかやけわくらしのちらいおりおるもし
自然の徳残まとは我ニ為に名をとこみ覚こてうおろ我を
うそれたうといふゆえたうくるのするゝれはされはとい
ふたの字をその字に用ひかふ教ほとに仰とおせ
めでたうりゝき事なり

五月朔日

今秋そさうに志て書寂なる惟山

わつさも夜のこゝろなるらひて
此遁居のことはともあしく生れ出にかくもと澄禅上人の
ことしれもあくこそ殊勝にも思ひ此上人ハ大原山の奥
古知谷といふ所に彈誓上人の開基ありし阿弥陀
寺といふあり此ぢうしろの山へ又二町もやはらんをハし
き石窟をほりてうちのかりて天狗の床とやらんいふ
その人の多く居ほあり此穴に入れハこもる事ありて菓落
をも食とし西の方に一向窓をあけ常に見やりむかいて
念仏三昧さらに他事なし此所にすみ始め七年
あまりおつくしも東西の山へ所ゝに世をのがれ住しうる
多くおりて住給ひし人のみつくさありてこひまう
つるま毎に十念なとうけたまはんといふ人もさうつきぬ人ハ流く
たおほくかつきつるまへもや西ばかりうくさゝ處く

之人ゝ法ひつゝけゝゝへ来をうつし法ひ広まと共法乃かゝ
しきゆいつゝゝおハしてもこうるゝゝゆ所ハ公家ふて
も日ゝ月ゝふ給ゝうゝ人おほ一家も行う時まハてゝゆ
又行うふ仏しうもいや増うて行くゆそきて
位うせう本当ゝふゝ人ゝ多ゝまハされて仏具こても迎
多くきれまゝまゝぞ一ツうもう法ゝうさてうきて公ひえ
四の事ハと新ゝ会仏者法流しやゝハうゝしてゝ
さうゝ海多きやとゝひうゝ巡ハえハし多ゝうして多く
うゝうひうゝ一向ゝやさうるハし以外の新世法祖て
うゝもおほくなうこも去つふし多成とも人ゝ
対してさハゝ紀中ゆそうゝうゝ人ゝ北中と
紀やゝうゝうゝうゝへしきぎやゝ紀他法正ふえゝ如
事ふしもあゝ次そのことハまさゝふりたよ

うゝ
専光大師北一牧紀詰ふて事ゝゝやうゝ今ハ一牧
紀詰ゆもふゝ法秋いてきゝゝわまりおゆくハしゝ
紀ゝ大師の四つゝ多うひこゝやゝうゝうゝ公をつ
うゝ人本京をうゝそこうゝ事もあゝへしうれ出
めそ法入道もんはやゝふゝ法をき新ひきれて
法秋なしふ多くゝの三流ふ領解して会仏中さゝ
し拙僧ゝ本ゝうゝ無名ゝ新世ゝゝへ世間の
和尚長老様ゝうゝものゝさゝゝへハ多くゝ一牧紀詰の面ふ
て変宗して宗仏中ゝうゝうゝ時中きゝハ家本い
ゝゝ中国の生国ゝ行ゝうしのいゝうゝ新えてしゝ
多く欲ゝいふゝのゝゝゝたゝ公ひゝうてかゝ要深の
姿ゝもゝうゝしゝう邪ゝの行ゝ年以ゝゝそ以この

まし給ふこなさ間し心をはなやし侍れとも歌一首も
こゝのなひらくし心のやし於おにもちう文字一大事
れ道も見ちりてつくる便をふまやと思ひしにおの時そ
人の作めそしりをとらひるを知らく人のさうらうにもなり
まいらせさふらへハ一句みやうなく念佛申侍て出ひきり
ぬいふ作念めし為候ちり称しと称ひ給ふれハ志ハし
閑目し給ひて兼信和歌のすゝみて志ハらく案
しめしうふみ候ゆかせてやさうらいぬし〳〵ちり光信ヶ信
祖師大徳のうへく大なくとみを詠しおひしとなし
されハ歌ハおもし近かふくゑ給ふへし云々の心をまり
いさ候ゆて岩窓かゝみへし今歌か心のさハりかちら
やさすおりうちんハ称ぬくのうろれさはりかろへし
まうく歌の二ゝふハおうし称の前のうちりに

外のさうらいてくかおおり外のさハりとはらんしたハ念佛
の助業ゆもちうらんなく歌ハいろ近もやめと詠せうろ
思し真實ふ念佛も申まい実ゝ歌もたまれうる
うれとこれとうちとり思てかうも佛神感應も
あるへきにあらまいハ念佛和歌へ一つまうさう称やうてせうるか
へし又さうハ念佛にも称をとりて修たへらやすむ口
に出るままにせて中へきよやちやうなる祖出称息入息も
修のすかく念佛もされハ称すおもひゆさる丸す
ある通とも作ゆとるまなしぬのゆへかせをとを
為るふ志ふしさうらうと常ふすし一まんハ所成と
れうて見をとりく作れハ至のつうく念佛みけ念ば
うへうて得まハ称千ゆ思へし数ハいくれとと
隨し給ふそととひくれも毎日十万へんつゝ隨す

るれば、見も聞つき、氣もそなはる時なれば、
身に恥しかるべき罪障、修せらるべくこ
とさらに、ひとすぢに、ながき三界の夢をさめ、
雖為衆悪之罪、唯称一念阿弥陀仏、
じんごうのつくるところの悪、ただ一念阿弥陀仏
滅無量罪と、説かれたる通にしたがひ、
称しまいらせんとも、若人欲生、
称ふべきなりとも、十声一声、
称ふべきなりとも、
無量の罪、滅すべしとぞ、
無我阿弥陀仏、
おもひ、
阿弥陀仏、
とぞ、
唱へしかば、
唱へしかば、
記し、
記し、
おとろ、
記いたき、
彼方極楽、
浄土へ、
参りてさいごの
阿弥陀仏、
勢至菩薩、
に、

二月二日、
阿弥陀寺北住房上人、
病ひ、
おもくなりぬ、
ひはくもたえ、
又のわ、
面影のほれ、
上人、
面をむけ、
ひざ、
立て、
西に、
向て、
上人、
仰せ、
ひしかば、
上人、
仰せ、
ひしかば、
西に、
向て、
立て、
念仏、
唱へ、
堂僧跡、
政産して、
居ながら、
に、
ねむ、
ねむ、
ねむ

ゆゑしに中年生れ給ひしより常に上人や
みまゝに我ゆくふのうちにて末逆ゆきもなる
らず法ゆく法華経の苦労となりまいらせて
そのうへ法華経を行といふ中にもこうるを
ゆむうへうくされて息の毒やうやうの波
函へまいりやうかなしく末逆ゆくしる
とりいへとも人をもいつもてさてあるを
偽もうてさおかしをふくゆくをハ湯ゆくさせし
むふもおらをはさうて偽りられ
河ゆくうし法へしく墓位解るとれ
ら次志法へ次の法しうゆくのまく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
末一日もおこゆ明ゆく外の仏法へも謗をせ法をは

してをしめの志毒をうゆくゆくゆくをこけさせ
ゆくゆくゆく事ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

一向に何のもおもしろくて一七日安眠困所とも心に
忘れきりもえくく物してゐれば国こわやにくく念
佛中度書籍ゑんくくろくしをさらくくゑ一日
一夜ばかりて孫くおきにかりかく数の面に一さし
あハ成かくしさ彩くにて四十年来ゑくゑ次念佛沈
せられしのおりこうゑ記するくにや

困所

困所ハ二字ゑろうくゑ物ゑかとかけり病所ゑそ朝昔
しきめ出ハゑ心やとむ時ゑくゑ食
物のやつこと肝ゑ心ゑそすゑさゑ人ゑ困所ゑめて心
き調ゑゑ紙やゑくゑり只一日ゑ一度ゑんゑ心ゑを
入湯をゑのゑ出ハ外に外心沈ゑゑまゑのまれゑゑ
見ゑゑて食をこのむとともおのつくゑやしゑ
ゑ記に赤いて食ゑへきゑめもけゑすゑの祝ゑゑく

ゑ平ゑれゑ一月ハ食物もゑ沈くゑ神ゑはゑくくえやゑ
し伝ゑてもゑしくゑそしてゑの面ゑ面ひらゑくゑを
ゑ物ゑしゑつゑくけゑくゑれゑ氣力ゑくくやゑゑ世ゑゑ
て人に対し食ゑゑゑ中くゑくゑゑらし人に
むゑいてゑくくゑの外ハ食をゑもゑ人にやゑのつくゑ
ゑゑ物ゑしてハ所心ゑゑさゑゑゑおハ面ゑされも
ゑゑ物ゑゑゑそし孫ゑゑ孫ハゑくくゑまゑきゑ
ゑくゑゑゑ面に出ゑて喫茶喫飯酒なゑゑゑて
もその座席ハ人にゑゑゑゑゑ困所ハ食を面ゑ
ゑゑゑ困所の食事ハゑゑ氣ゑゑくゑゑゑ
記くゑえくゑ記心ゑゑゑゑゑゑゑゑ柔人
に対してゑくゑゑくゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
まゑ見を弁ゑゑのゑ困所ゑゑゑゑゑゑゑゑ氣力ゑくくゑゑゑゑゑ人ハ

朋輩かしこまりて此心をくるしめむうちはれの
ちからさめもちからぬへしこれ困苦の紙衣をも
て心ばせもつらつよきをかくつつみて云ふまじくして
孫くれ時ハいかにらるもおきこゑをれハ我もまたうおきわ
ほ食しくれ時食しまくきまれていつとも食せに
汐位屋附のまし小次志いて法をづき結構ものつと
をえうてちからをさくれうちに法くと思ひめらせハ
誠に小人困苦不善れつくさりこまうなくうう
ちらしくほうあさけるを我ちを見ず也原者りう
す道心者にのうす蹤懈怠一乃

敬逸人

こうちゑこ巻第四

七月七日蓮華三昧院あてたまひし霊寶目

金剛胎藏両界圖大師御筆二幅阿字鍵字成

身會の曼荼羅御同筆二幅梵網經御同筆

漏分布經光明皇后御筆佛名經明遍上人

御筆觀無量壽經解脫上人御筆大師の御

顯真如親王御筆同御顯明遍上人御筆同

上人御自筆彩弥陀三尊惠心御筆十界圖

御同筆十二天十二幅今宮圖筆正面赤衣乃遍廣

執拂を膝小撲〻番牧溪筆三幅對中（九欠）岩下虎

同筆左（中欠）三時梅補之筆右波上祇懐義筆達磨

彩輝筆蓮乃糸九御裳濃二十五條代御裳濃し

或時尚寺開基明遍上人祿寶乃室中へ大師出玉

覩まゝしく、見はてれ釋尊の御附屬あるゝ所なる
ゝ今汝に屬せゝ西方れ記文をのたまひ、袈裟
御袈裟をさつけわゝへさせ給ふと彼人は佛寶あるゝ
は寺門外不出世、そのうゝは國の大守おうゝ給人と
ゝ御登山ゝゝてゝゝゝ

今をも物かしこくは貴をこそ花もてわが妙へし
こうえんを強記ゆゑわれ人の藏れ門乃貴を
とゝと取ても盗賊の罪のれくこし我ら如来藏
の貴を家と尊に雅ら見をさまゝを舞

同東金雲りまゝて不斷經を誦ゆして

えゆ　おもゝもゆ見ゆきけるゆ面ところゝ法の声く
さひしゆを為て思ひし心位もさゝ汚にわ面ゆ殺れ久書
十二日女房花をゝくく
人ゆゝ為てまゝや女房ゆ
貳人の日むゝそぐけりのわゝと文ゆもゝへいも
佛へに今れ世に人をけおゝをゝも物をといひし
思ゆ家ゆゝゆゝ人ゆゝゆゝゆゝむゝをも今乃
世りゝゆをけりの人おれゝゆゝれいゝゆゝにゝゆ

原信ゝゝゝゝゝ人ゆゝゆゝゆゝゆ人信者
道心者のゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝゆゝ
くゝ形ゝ見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
くゝゝゝ法ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いたはりとなげくかけうせなとさるることさられうす人のこころにはいとはすぐれたるひまてもなく人の心をたくらうして古きを和とたのもさるなとむしれ和をはなれ質をさらはしなる文をはきみせり打はくこはるかをしきあるうくしきをもはなれて世くまふなふとなくおもしろうおもはるにはあらはやさしくもたくましくしかも形の外ふるもいとをかしわるはなをはなれたるをはなをふされたるを是をうはなるをうしなるをはなるをはなるをはしはなるをはなるをはしはなるをはなるをはし

勢人世思ひ為ふ事ふりにきくれば心わかれぬるこの
つゝみをきれまけりあすきめる事ふを端と
ゝりうたはさてゝ三ちゝ
知ゝ八悔の八千度ふれ
まくおもし是永心
あらう心をちゝせりたゞひとりしてちさうゝ
世の中形り人八唯さきこのむおとちゝを又強ひ
いとふもとなき心ゝ
のゝ愛憎取捨をお忘ちはをのつゝを
ゝしちゝゝ乃為ちも絶さらやい

女院薨去形ゝ
白昼ふ御殿の棟ふ狐
ゝとゝふらりゝ

御殿の棟ふ行ゝ人物ふ又ふ狐出
ら色いゝ面やゝとちりつゝ
とすゝ
ゝれ八ゝれ狐知ゝ
事やゝ久しゝその時君御つとおりひはをて
狐ゝけやゝも尚流
泣くゝ姿をゝ
ゝゝ
なをふちけゝ
八誰ゝ
けとゝふを見なゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

御殿の棟ふ行ゝ人物ふ又ふ狐出
ら色いゝ面やゝとちりつゝ
とすゝ
ゝれ八ゝれ狐知ゝ
事やゝ久しゝその時君御つとおりひはをて
狐ゝけやゝも尚流
泣くゝ姿をゝ
ゝゝ
なをふちけゝ
八誰ゝ
けとゝふを見なゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

東西へうれ数今は世を狐のごとく人ふもとをけ
ものに
水清ゆして奥さまの人きらして友ちと
うりかさとさもあるべし出家隠者のごとく
ゑくぬるふ世にまもたしとひらけて人く
のと出ひおくこ経をんふ我のこ心ひを記し
ともあ人乃ひさはり物あたるものをもちくと
なけるものをんはまふひひし永ひと
まもおりふんもありめへし世に
しふ志あるらはあるうさとうさとうき
くゑ人あるもこをせ免ひとおとなく
ちるこなるくこ竹えくをのつくと通
うへし又ふおふ世になれさきく

ちくハ人はそしらふ乃ましひ身のけ通ちむ
さとはやまこ記まこわるめ立ふなれ人ちうし
ちるうくちくこ考ちるもひ記ふ赤くも大意
薩摩ハ国さと海ふをちくを六通ちくひ流生
の心ひ意しくさるふ小海度せ法い邪ハ
光城やうけて墨ひまちる法ふとそひ涼山
迷岳をもふとちと市中塵俗ちもきくを人くと
ちれむひくおは家ひ乗ちくうひて若をすく
免悪をちひし免志いて自の心をおとくせを示く
事く物くふ順しくを関法乃ひうをちさをこうハ
へちくを後しく道ふ雲国形ちん人もひう私ハ是
さ長度流生はひをむ孫ちて仏者こもを四者
こもを陽去ちもひへれ者の月ゆを記ちくてちう

海うしほきまく春の月をおぼろなるものと
やふして此時百和香を和育す天地と人倫とさう
ふこと形容事能はず

吉凶禍福わざわひなくなハのおとしすべき天魔是
ふ同しうつうふも若し仏法ならハ魔の障碍必ずう
逆魔ハ妙せ記つ順魔ハ妙せ記くこの教へし
順逆ともふ所魔を表わすくつせきいとふ色うたた
無念無相の所ふ安産せ記何ぞこの所ちうあよ
ゑせん只忘るあるべくハ所魔をひきうるくくの心
の中乃魔ちう同氣相求て是ちうへ色し唯つ
とえたけうて自ふの内魔を亡さへし此魔を
打勝ちまんふハ勇を立ちうちうしう

十三夜

ちうしう世界ハやうとも言葉ふ出ずまて立ちめる月乃表と
沖へ入宮の事ちと思ひ出ず
言葉ふ出ずめる月ばんておるの暁のえやまちうん

十四日鹿の遊ちうとうとうく
人とハ奴ふ山の麓此友ちうれやうれハおーうれ毎ふ別来て
住吉そーう松のおちうは麓此麓の恒ちう蓬の種をま
記をきうれハ

花やう麓の松ふ不わうれ〳〵麓のくを記ふ毎ふ人やうき

十七夜青昂月光のふんを
立ちハ先ちうふ書ふて奴ふ言ちうう言葉光ふ月ハ不のめく

十八日入おの後祖れ〳〵麓の吗をれて
入おのうちうかを言葉ふ表れて立ちふ表れうれうる
廿日花形陵ふまちうしう冷泉大納云

為世郷入道朋釈おのれおのれまして
[illegible]
[illegible]
[illegible]

地ハ木経ノ切ヲ以テ張ラル 柄三脇ノ形鍔ハ
金伽羅制多迦ノ二童子此箱のふたニ牧
角一方に六天ツヽ十二天ノ圖有箱乃内黄
帝金泥の経の切ふたに張ほゝ詞ひらく
代双乃鞘箱ともに皆御自作なり

両部寶冠二　花蔓并紋あり
但花蔓の花ハ紙ふたに張ぬき彩色紋ハ唐織乃白絹
金のうるみ物輪宝羯摩あり金剛界乃宝冠ハ銀ふた
五佛の冠像并種子あり胎蔵界ハ金ふて佛像種
子右ゝ日ゝ額ゝ玻璃珠ふたゝ光象ハ黄金ふたゝ
ミヲ宝冠ニツるゝ裏唐織錦の汝り霊獣あり
代入一箱上代物黒塗かまくらふちちり蓮花蒔繪
あり

灌頂の時乃初後夜ハ天蓋二并　龍頭二
金界ハ唐織白色のきぬ胎蔵ハ赤色のきぬ何も
金泥ふたゝ梵字をうけて四方乃瑞路ノ四隅のたゝ
いつれも糸ふたゝ組金玉を錺りて箱右ふ同ゝ

明鏡　二
ふたゝ三寸五分許両部の種子あり
箱黒塗菊の折枝蒔繪上古物

六牧小屏風一
幅六寸たゝり長一尺たゝり額の形内
ふ五佛五菩五大尊四天其外諸佛諸天
の夏像板多彫刻せり裏板黒塗回り
ふうる物ふけゝ折てかけゝ蝶ほうひあり

團扇　一
破壊せゝ七言四句の詩文字さゝゐる
ゝたゝ

硯　一
ゝたりふ夏獣の形海の向ひふ阿字

右八皆大師御所持乃霊寶　左右ハ頌一句ヅヽ彫刻す

寶塔中　五色の舍利　中院元祖明筆御所持

大師　ほそき髪　水精の中ニ入

同御入定の時鉢給しかたもの切れ入

多羅葉　一　細字の梵字あり

佛法僧鳥ノ翅　箱ニ入

數珠　一　甲斐信玄所持玉ヲに微細ニ金

くりもの糸にて紐物あやをかして色

つくりあり

此外雲数ノ昊寶あり

秋来月をもてゝ攝思多ニ学ひしてい山ひ知数

時定光院激雲老碩の詠り拙し歌こそ

花の雲又分ハ[illegible]月をもてゝ知数ハ[illegible]

この色し　激雲

月のあ秋ハ数ハ知数ハ[illegible]ハ雲ハ[illegible]の花し[illegible]れ

十五日

斧の音も絶へ[illegible]

十六日

松杉もはるかに山の下家ハ書[illegible]や庵の明ん

八月三日高野山を下る道ハ

[illegible]も宿ハ[illegible]

西行上人のもきよと[illegible]の秋花桜ハ第桜して

天雅ハ去ぬ[illegible]時の書あり[illegible]

まゝて

[illegible]ハ第ハ[illegible]ハ[illegible]秋ハ天雅ハ[illegible]ハ[illegible]の[illegible]ハ

四日の朝天性を生ずる慈尊院小系り以所以
くこそて舟ふのを粉川寺ほ池場ふはく岩粉川の
溢觴をうのくひなを乗り紀伊國那賀郡の内愛宕
補陀落浄土をうはしく彼土の紀主千手観
音ようあらはれさ給いしとるんむしを
以ほさ給ふ尽く谷草志きりあひくまらの弥勒
乃者のく竹ようく松人なりてハきれふ毎ふ坊ふ
者ようし仏谷ふ道ノ臣の命とやりつるさを毎ろう
きのここのおられの末ふ大伴のれ子ふ古とふ人金
堂をうるを事をおくとして毎ふ位を
光仁の帝乃時宝亀ふ改元しを毎のは毎
ろうふ出しふあやしき光ろ人毎り彩ろろ
ふさしもひろをかくしつ三夜紀夜日し

さ毎ろう事程を彼人おしらく見毎ておろふあ
宿世ろ法のえふしありて見なるふふも今ろ毎ふ
瑞をおくなるろうしけ未をうるろ業をもや毎
いうもしてい所ろ堂をいとるく建ろ仏像をと
糸をんとの彩ひ志きろうおろうて伝ふれと思ひ毎ろ
程ろ毎ろ乃しを葉しき童姿忽然と池中ろ出現
しふひくの毎まくさの以めやしを以をハろろ
やそれふほき何ふくも祈ろうきさの伝ふへし
心の毎くふうろて以ろ毎とあり程て彩家
こそ又のやしきうなろ見毎人ふのしと見ひ太ふ
ろをおりひしうろ和て当像安重の祈ひの四ろて
おきさをうくろひしふさろ八毎ろこの拙ふ八少してく
仏像ろし果ふハさなくろう門をちろ五十毎し

それとは別に御しるの事ありて一七日の間空室
ふさもりとり八日ふ成し　曉波門を毎夜人あり
出ると云ふ人形　彩色美の尼ひとつ形
長宝寺入道殿八幡宮へ参詣ありてあるべき
金色等身の千体の尊像光明赫奕として光を放
ひしとなん今の本尊是ふ波三重男
あらはれ給ひし　昊池ふ沼ふ四天寺を御池坊と
いひ伝へ彩川寺と名付　ともに又九あの池坊地大
士の霊験あらたなる　ふをおろかにもうちへ
まゝ奴へし　要記おりむきハ当寺孫記昊験記等ふ
見へたり　後り上古の回禄のをハ三徳三年孫生
九日いろる年いつなか月日りめり来ふきん堂の
間ちり火をえ切りをハ四星人ちの外村くちり

人ふなりてつをあつまりて行れとしれと防ま地うち
ひく強ふ時の石礫ごとりの見ぬ皆ふ見ぬ
をしく勢ともさうふひろ云ふ所地坊北住侍
亮寛律師大悲菩薩容と宿世ふ御や諸ひ給ふん
今もちけきてもせんなしちさられ焼失せ堂
ちもひろおはいて再興もしてんものたと人中ふぬう
く　本尊ふ初形して灰れとなれとふ不思
議ちうれたの石くふ焼ふれて中ちを奥殊乃形あく
少ち形を多ふ丈ふ内堂再興菩薩ちく彩ふく
念仏中はゝ村里をめぐりをれを人々見て感心信
伏して涙もく老若男女ふを用ふく念仏至誠
つ西ちく東となくあきられを又見ぬ信心
和し摧ふされて至ちふ涙ふと歓喜を出

まを掛け、真外奇附なるを抽ぬなる地築れ木引
も観音の霊験を奇ぼうてこうの人させし
免拘るこの教堂の新まれても当号を称しつくはをよを
やせをいうるくと若武の二字なやもうきをこも了誉
ちやし律師にはうこの方を捨てはうこれ
なる又やはれ面るものハ豆乃いと後ちろへ月欠ふ
まうてるを仏へさうハそのみ謝礼ふハ紀ちを孫をこき大
慈大悲の所利益を聴守させしむ面てとるれを
そのを薬ふちくこのひとくんくむうをはとしそをの
くちを仕をを和をけこ名ろを外上中下十方へれ
心はひ外変万化のちくうこ紀自化利益こうくう
外女千眼の通力を拾し孫ハいくく元面のちす
（紀ちふしもあうす日こ月こう後依ちるの

草の所ふちひくこのことくにして仁王門をはし免数多
の頑守の沛社又ハ三十三所の昊像堂を拾面てこれ
なるされといさうこうの事ちうを祢を年久くくくてな
堂やうをたてふちれうを今ひはけまして来ておを
なるみちりといるをいへを方面ちを教ハしを人玉の
ちくこうのき主孫上ふ面ちしまちうを経実社
とふ数を彩うす言紀棟木ちなさくへまれ面ち
木をまうを彩猪ちもを元経紀こうえうりのくこの
こまうくあやをちしてさうなるこ鳳の翅をのうを
似うを人り律師のハハいもさうを形り是良材とはを
れ面ちを折あひくいをれまさり世ちこの教ほくうさ面
もやとをくこ見いそこ見ちる面くあ感涙袖うりきあ
をやけしちうさのくこうを大悲の法ひうを四方に

まなく盛りなるむさつ、まてらん人思信し月
ふ信して有るく紀ふるさらん今思ひあるとされて
真珠の月端符合せるかてい紀ふる
彩川寺ふ紀古池の水ふ拾ひの海乃色もん人名れ
九日夜同し寺ふ月ふ
月ふ彩ふるふ法の琴ふ人てさく弱ちさ色ふ秋の山ち
丹生明神御社奉納十首之内
夜鹿　日位信勅撰
物ふ、漏りと鹿もふ面てく書意ふ牧のまく
十日律師とふ舟ふ和哥ふ人ふ岩橋恋
真許へ六十一日の夜月の為ふ船を浮へく
秋もさらる月ふ人ん夕汐のさそひて出ふ秋のうら面
恋真

ゆらさもさらる波路の月を見むとて舟ふ出せて
十二夜も弘ふくこもて月
漕くれ蟹の面く火ハ迷ふて漕れく時ふ波れ上の月
仙雲
あらそ見舞新ふ人ふ祝ふ紀の海原き月の光ハ
月ふ掉さしともり真して盃ふ紀新ふるとろ
し波ふ彩しも水中ふ白雨を繁くさ面して
月と月ふ映して魚一ツ舟中にこひこく面り面人ふ
制しくいゆまさらやふいそ紀こ人てはるそとしひ
れを彩くふきらんとをにすくとふ物の下ふ入
てふ祝ふ幾度もこ人てはうさ人しこうさ手たハ
こう紀人さるかとふ舟の中ハくを敬しゆんやうう
きらめ彩くまるまくう面奥后ふ居ふ紀て

むはもゝ少成てはしおのこも邪ゝこゝをふくゝいひ
ゆゝく能文様まおさうる法師ハりし法のひ形く放
ゝゝに惜きさいとゝ形くりゆゝ入んとゝるみ古打し
てこう結くしてこうゝへく海ゝとゝる川ゝ流ゝ運の
はゝき奥めうかとゝなけうゝ多法こひ者れたいゝと
ゝ法竹ゝく

八月み奥とひこんく宮上川いゝふいあゝゝ見もいな舟
ゝ狂奇法ゝく多ゝ舟人乃いひしゝゝふ自然と松
みこひさむゝとの運の蛍ゝ奥又海みのゝ主飯ゝ少く
ゝとハ運のはゝきゝ多ゝ乗込しも不思議ゝれ逆
も移不ハ微ゝうあやゝきをのゝれしさいとハ鏡の口を
のゝれしとゝふれとは奥を引ゝくおゝ移ゝ乗人の
ゝとのゝれしとゝふこひゝ海ゝゝも波ゝうゝ行く舞

十五日おりふしゝさゝ雨ゝんとこゝもみゝゝはく玉
は雲ゝりまゝてゝ多ゝれゝゝ法亭ふ月を待しゝり
春のゝとゝ雲の墨ゝりゝれゝ
なゝて世ゝ見ゝつゝ今春の秋の月ゝれゝ恨ハ我ゝゝゝハ
初秋をゝゝゝ法ゝう雲の絶百ゝ人初ゝく文ゝまゝ
月ゝ波形く陸ゝゝ芦浦や海のゝ宮中ゝ月ふむゝひく
見つゝるゝも老とハ形ゝしゝ芦浦ゝゝなゝゝ秋の月ゝゝるゝゝ
後も面くゝゝゝんゝ玉は海ゝゝゝ秋の月ゝゝるゝゝ
ゝゝゝ玉は雲の神主楷供宴丈奇一首神ふしきゝ
ゝゝ

秋ゝゝかゝゝゝ秋を玉は海ゝゝゝふ月やゝゝん
ゝゝ

似雲

云ゝ葉のひゝゝを玉はゝく玉は雲ゝゝなゝゝ月ハ物ゝハ

十八日の明け方の岩橋峠を出て熊野ふまでんと
せしに此辺の山々紀三井寺までを見し時
沖津の山々に白雲の出るを川辺にて
嬉しきのちれなる海をながむれとさいなき山々に白雲
忠真
殘別れ
立ぬる宿を忘れ雲ぬ立こそ
似雲
のへ
雲ぬ立こそ形る山ぬ分るとも行ん人の宿ハ忘れし
玉津宮を見やりて
出る日乃花ぬ見そ玉はゝ浦入の浪ぬ沖の胡蝶
そのうち後代の世仮しん浦初潟を見て波のうへハ
見そもてゆ面影の立ぬ海の初しま
とゝ〻しかく〻ふ又思ひ出て

去ぬのくるそゝし波も冬の秋ぬそゝる浦初潟
日数湯浅村別所清水寺ふ宿し又の朝出て
出て日高郡藤白村天音山道成寺ふまつ
當寺開闢ハ文武天皇御代大宝年中の
僧茅創紀大臣道成公建立し給ひし也成
と名付たり本尊観世音高浮檀金一寸八分世
容ハ海底より蜜人の拾ひ上るとあるのうてせ給ふを
後小又法長一丈二尺乃木像をはりそのの所後閻ふ
納めなる今の本堂ハ豊臣の始めて八礎硼天
皇御宇延長六年八月同国牟婁の郡まるさの在
司うむ生れきよひめこ十三歳の時奥州白河の
関安珍熊野まゐりふ宿しけ家ゝ者ゝ奇
ひきの世乃契りの不とは三熊野の神ハ者ゝ人ものとなるとゝ

安孫子

三熊野の神乃志るしの面と竹うふ狂言乃末の面のもしふくれ
かくしまみうをしくほいひし繋りのうちうしこそ
姫せちうら羅天て御ふ地獄と変して鐘を巻し
おとせ世ゆくくおれりの面ハ家ふハ姫くを妻き新ハ
代寺の縁起ふ天人くうり寺を南向ふ堂の前ふ安孫
のかうを懸し而鐘を巻し鐘楼のあゆくおるひ
て再真鐘楼の旧跡も絶てうきさうをくこうて
苔の乃ふ西の形中へ出れハ九の田中ふ地の死骸
を懸ふく塚をつき巻し少今ふ地塚とくおるし
柳を植巻ふり又御むうひの山れふもとふ苔宮城
かつ紀出し蛍の社あり扱代縁起の内ふ出ハくとけ
れくも後小松院の宸翰絵ハ土佐将監筆ふり表帯

蜀江の錦二巻ふり則當國の大守南能院殿御寄
附ふ類ふ紀霊寶ふ代ふ右の方ふとふ出て
おふ行れ拘のおりひあり引きふりまいしふも湯ふやふ
法の水ふ消さうやハ代寺れ鐘ふ沸つひし人のおりひも
一念の恨ふ巻ふ美女も忽ふ地獄と変しぬれと一念ふ
ゆ他事ふ巻ふ若代修せと現身成佛も志ふ巻ま
して尚末代の疑ひうあうん寛ふ二夜者して廿一日
田道へ行ふ入りてふ法ゆふ上ふ
月日ふ人嫁の変ふうさふ来て久ふ三熊野の浦れ演ゆハ
酒このめ者人と成ふ来れ姫を三りくふあう
そひしを竹ふくはうくとれりひ合ふうあいつれも取
捨弁しかうし孫ゆ酒ふ花の宴紅葉れ賀祥賀元
服公事れとゆもう拾くくふ折くふもうふうもう

かく心置なとあるべくおりふしもちたるやうのふかうやまとの
云の葉とも吟ひそそしつて酒あけろとかくん時あるい
者もうれ京小頃孫子ぬきのさもしをとりうごもも
おりあもちろくわさうくわさうとうかうえくろ高めるく
無あるものあるさ教わしもちこふろうハのあるうぬ
ちいりきふして物の左一枚あをうく盃れさうあるに
を記あもんと学ちこ入ゝそんたらんと以法を言いたるあつき
けしも日西ゝかく始きこの主訪いてあもうしれ座の
木陰新ちきやうもあ乃うへうけうく折ちあつこさい
なとかるそあゝ志ゝしこそふさくゝうみかを
清きうるまに盃ふさきて眞しさまちて宮ゝを
めうう小ゝ盃をうへあもうゝ舞と設宮を志つめあう
むと以ゝまゝ月のおとし訪きこ次ゝまうれ影を盃ゝ

ゝ注しあもんと云もゝりうゝ分を如れあけあう
んと以法を言のあ物やきゝ人ゝつゝ一瓢をたう
さゝきゝうんとあもこうひゝう春と以法を杜之茅
の盤中乃塔最明寺殿乃かうまれうそ以盃中
乃孤俗無ゝりてあれうゝ心ゝ志乃盃きさうう
山海の珍和を者とし酒ふゝあ一ゝ住居
の命令ゝそむき親の教訓をとれ人ゝこもゝ志
ひそて醉狂さゝとさゝあゝ乃性をし
うひおゝうゝあゝを夢のあんうきうまうひう
こしきうふもなれ又さもあう海きゝもいう
うあもて以いうひうあひゝ孫ひひ焼をま物
ハ或ハあうきゝをさうひをひうりのはそれを拾く
お物乃ひ物うあうきゝ元ゝいて寅いそれう一ゝれて

一ぬしはふまうんと舌も毒けて今てとひきこ法師
ひゑあやめもうえにきひまひ絶ふ仏ふもひうぬ
柱かとうと毒れうをうてとえれを元もううぬ
まきなえにと志もうしし酒産とうの城ふさえに目をおは
ひううさしもを毒き事ーるうれい人く額をこ
らへえ宮を酒めーなうとうえく乃給仕をうのま
ても真はさ毒ーうとうこうはうふに盃盛
狼藉いてんううれうーー誠ー仏のいまし免ふ事
むへなうこのるされを酒に真おはれを害も又おはく
毒粉真をれ毒害も又をれ一得一矢
たれをもー持とゆへしけニッこもーのまをうんあハ
志ーーこへをく酒の害をいは遠公はしをうう
李白あり志めりされをも酒の清濁は聖賢ふ

を又般若湯ともいふ酒をのなし孔子及び
三盃大乃ーー通しー一斗自然りうるとも一休和尚
枝葉毒くうの云の葉無尺指士寸天るーの語
はさうひみ乃り形を行とまくを見ないまを免むは指士
ゑいくうーまつーを毎日人来家ーー所ならせて世
の毒ひとす人やとして云日乃縁をわくふれを好く
酒家ーゆきー奥ー后ふるを酒をうるとしてをうふうを
の毒いへも形くきれ使るる境界をく酒者飲味を
れをつのまふうあいまひうををく只常ーー口毒た
毒ううるる殺ーーすー人いるーすー人いるーとを少
を人々る或人は結いうる事をを問々を人天地の乃ふ
すー人いれーー人の心もすを人いなーすー人いれとをいひ
くてうをひまを乃る又問々の毒のーーにおをれ

多くハなれとあやうしなれとこゝろ
ゝやうとあくいいう
ゝをあり給ふやめハやんていいきゝ給ふ時ハ志ゝ
皆人ハうゝ死こゝへ死ゝ者おゝ家業さうゝ
人やうゝ時ゝく所あを目の前おゝそゝへても味
うちゝり変ゝゝにあゝく喰ハれを厚さ人多ゝ
きあこゝを主ゝてもゝ問ゝり唯ゝ死ゝ飛ゝ行ゝ
海ゝ事ゝ行ゝ見ゝへ死ゝ人ゝ飛ゝ人ゝゝゝやゝ
る時酒さゝゝおゝてもゝその日限ゝゝ
人のゝゝゝ学のゝ学こゝを滅の多ゝゝゝゝ
色ゝれ人乃気時ゝ行ゝゝ時ゝ乃ゝも死ゝ
のゝ食さゝん乃ゝこのゝ身の損ゝゝゝこのゝ人ゝ
さゝ人ゝ乃ゝゝゝのゝゝゝ見ゝゝて世の中を
さゝゝゝゝゝゝゝゝ法師の無天居士名付ゝゝ

その法師といふ者ゝその面をとゝゝゝ誰ゝ
天地ひろしと以ゝともさやなるもゝゝ芥子ちいさ
なれともさゝゝゝはゝへゝゝゝゝ引面目坊の
面ゝゝゝゝゝゝ引面目坊ゝゝゝゝ
廿二日芝村小右ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
へ廉を遊ゝ小ゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
少之ゝゝて云ゝゝの言又いゝゝゝゝゝゝ
ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ

今月も移り小田守ゝゝの多ゝ少ゝ多
廿三日の釣閑ゝゝ小西屋ゝゝゝゝゝ
ゝゝて浅ゝむゝゝゝ裾ハ紅ゝゝゝゝゝ
ゝゝ長ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
捨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

んとそれをあらし、それはく、ぜんぜんぶんぶん
字小笠をやとをあこそれろもちつゝ成こゝんかと
はりおろへ、雲のおきうゝ落れさるゆちゝを日あゝ
まきり風強く吹めへし、されを是ゝ家ハ〻く
山路をにあの畳て北斗七星ゆんあゝその廣き笠へ
風さういおハいゝあゝ〻ふとも一歩も進こゝを成こゝ
の教師と志ゝ〻こゝめゝれとさゝもあゝ〻しゝ
はのゝるつゝ尼一里まゝゝるゝも行て十條といふ所に
あゝ〻の山路の栖二ツ三ツ有ゝ所をゆんとせに
上な教坂ゝ男女尼おりゆゝ六七人ゝゝほひ
ゝのゝゝゝもゝく教を聞れを菅の小笠の背ゝゝ
是佛のみられは光のやゝふ笑ゝ又ゝ来れし
それ此乃蓮葉のゝゝく吹ゆゝまゝく息も面あけふ

大慈大悲乃はあそけゝく〻いゝて今此殿をはゝうゝう
誠ゝく家ゝ来ゝ面ゝき南無観世音〻〻菩薩ゝそゝ
小唱へゝ名扱必を向へはゝ〻ゝ姿をゝ弱へおそゝ
此おゝゝこそ生ゝ生ゝ〻ゝ此今きゝ〻る根を実
みゝゝ八夜ゝゝ年の背のやゝみてほゝきゝ道一すゝ
そこゝ此ゝはゝ時ゝそゝみゝゝや笑へ吹おとゝゝゝと笑
を面ゝゝ〻此ゝ〻ゝ弟ゝふゝゝゝゝゝゝ家ゝ
来れゝ必〻ゝ笠ゝゝとゝゝゝおゝひもゝゝとゝひ
きれをゝんゝく〻ゝくゝゝゝゝゝ波坂へ振ゝに好く
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ笠小風吹へゝゝゝ牙ともゝ笑へまゝひ
落なんとせに驚此ぜんゝへゝ彼猿へとはひなの
家へ此をきれをゝもいゝゝゝうつやせんもゝ此ゝきゝゝゝ
此苦労ゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝのゝゝをかつゝ笑ひもし

夕雲うち西風尚烈しくきほひて戸障子も吹
ちらもれんとさはれたかしこ家もあらしに
たえうひおさへ毎夜けつゝ夜もすがらおびあらしぬ
たゞむかふ赤ゝしぬるもうらゝ西風きほひ秋の夜さむ
古日西風たつまりて代官城さきうらゝ遊郭小屋代
西の河原日の風西又こゝのさそひ舟小屋四ツ屋敷
といふ村をたちうつる西の小日傾きなれを者求んとて
れと家をし洋小の小りてちいさきこゝやーツ又毎
立ち一夜といひられを者うー糸ゝたちをハいと安
ゝ侍人れとなる入る蒸赤の底を拂ひ見ゝ二軍
半西ゝ軍ゝいそきゝ行ゝ父者まゝ小ハ者ゝ
こゝゝ出いひし城代やはゝさうゝ紀軍者
小ともたゝものゝりゝ家ゝ小老樹枝をまゝ

ゝ立もみへぬ木の下陰を西ゝうゝ小ゝ坂ゝうゝ
毎ゝれを廣き山川の色を墨と糸ゝをたゝまゝ
らんやゝ形ゝ濁水黑ゝうゝ小ゝ石ゝうゝとゝ
れ濁ゝうゝ水ゝあゝゝ紀ゝたゝうゝを跡へ
立海ゝんとゝれを日もゝや等ゝうゝ形ゝけ
ゝゝ一夜八代函谷の樹下石上と見ひしゝと又思ひ
又せて捨ゝ方ゝゝせんゝ紀ゝ小猛獸の害もゝ
ゝゝ栗彩小首宇治川をゝ氏士のゝゝ
例もあれをゝゝ紀川をや大悲の佛
ちゝ城者のゝなゝゝ伊のあゝまちゝ小ゝぶと等
等を唱へほゝむひの等ゝあゝきゝあゝき
いんゝゝ形ゝ　さて湯の川といふ不あて等みゝん
くゝとしてやゝもゝんゝ毎あいはゝゝも形ゝ皷の

殺さきうみ給ひしとき御中とゝ御ひ給りしてそれ小兒人
の去るきうみ給うしに不謂むしろ面ぬきのこもろ家
をとろうんと思へと怪しにやくをづくをきけたえも
さゝぬはくをいくぐれてゞくろ殺してこくハかん
にんは万歳は代もさうへてとうめ兒又ハわゝあひし
うしひろ秋のさとぬきこまひうかつろもりきたし
めつゝし故あてハ春のもしめの祝ひちとゝめうはうく
歌事ハうきくはれと思ひきろみやそかの者こも母
は宿小仮寝を清小殺ろ加やうの者と友寝
さろことと中くおうしてろくとお語ひはひ
てゝあさきふうかてつろ云葉みこくハかんすん万家
と竹へしろ家きくひやきりやもあくしこくろ
みてハろ紀と問れてひとりかの中ろうこくろのあてハ

さきうハさこくさうんあんといふくゆえいふとい家天下を
面ろ行ろ君ハ殺意ハ行ろ面ろ世代ろさう面ゆ中とも代もも
行ハさ徳ハ恵ハ万世代ろさう面中とも代もも
災難こもに人も唯恵ハ恵世
しくくし徳ハ恵みてさうそさうくといひきう代苗
祝感心しあ云しはもひ万五士の歌又後世も祝うやれ
うき世もうくうや後世うこ我後世もあき又お後
ハ志ろときこのそろし寿ハ小こ代生すうすこも
郷しとハ小れの乃みも叶ろん仮和のそ御ともも
おろそのみ又家而ろ竹
古五日湯川を立くをももけハ小ろ生て西つ河
京とろう道を変して川とるはし家家まろ
ひ松樹おれてく小路小横面ハり又ハ軍ろめきて

根をさうしゐめ　梢を行めを見るふぬき見しそ
ちに行そハそ木の根をこりはくをしちうろうして
ゆまに本宮ちうく不と思ふらいさうゆく
をなて婦しくを見ふおふし又ゆありられを格ろ
をハ絶ま八ゆりてゆのいきゑひゐたるくいうを見ん
と惜しゆ過ゆゐてをるくれたむひの屋ち六十
しうをとをんつる老婆婦人をしそれくふやを
ひまち行へるくしてまいくせんさ行も寅ゆて六十六
部の巡行者をゐれゐくしゆハつの外
をちゐもしをそいひをあつをワうきくさ家唐
りゆをおうけ行へをて引うけひくゑそゐをけ
るくし教見ちん大意の陽ゐ不思議ゆるくく
思ひつく会ひう謝礼をのへつ本宮竹の場ふ見く

志ち結ハ正ゆ和こしふきけハ人をくいろうえゆ
ゆうてかをこうをの先ひうれらゆあうを見ゑをふ
無理の陽神意の陽ゐ見ゆをけ又ハ親者の陽ゐをを鼻
うちうく焼　注をろゆも京のことのくやもをれを
以出ろをりり見も行れ人るめうを見ふをなうく
なうく中ゆ面くをつる陽よをあけうをゆくふつ
くの人をを問をを八都くをを京都の者ゆをさうく
ゐ陽眼を出ひて名ゆうくをに逆ふくを志れを
家ちうもゆの志ふしをん人すいをくおはうをふちう
ゆきく見を紀の世れむをひちう舞人乃ををゆくを
は病いうハすくをせをうく大意大悪をゆのくをりて
かくつくを目くふもひうりををんせをを行へと行歌
をや合いつを目乃あをやうちををりし者をうり

はひ三十三所へと志し、それ仏物八まうてそれら毎に、
こうりくみ杖をたゝへのあるこゝろ紀伊路を免
ゝりたしみこゝろのの宮はぬくそこなひあるむう
北ゝろゝ古日たゝのもその悩らをいくりり助て、
こゝのくたゝ移ふいさてゝうりて出し、椿路の和もこもく
成果させんゝ形ゝ紀宿八立寄屋つま新の下つゝ
ふゝろとも一夜あるさまほゝふと祈りひせみ毎ゝ
ひゝ分あるし丸表ふてかゝ成はけてれ小屋なるゝ
有ゝさゝふたゝるも伝らゝとゝいしみゝ那乃国
あて八何不(イカデカ)そと問きれて何来の家和あて伝ふとゝい
伝きけ八紀者の主人ゝ新蔦ゝ和志れゝ人形れ八
杖もひゝれゝひ椿路のゝるしさいつきおろゝ形ゝ
ゆやハ和歌きれと目もゝ小伝ゝたゝらぬ八

ゝゝふもゝふ毎ゝゝ伝目お和路ゝ見もんのまゝゝ
さゝんみ紀ゝまゝ丸伝のゝやゝいのゝゝゝんけみこ
杖伝れと折和伝ゝひつゝいゝ宮乃はゝれをやを免
ゝやとゝひゝゝこもみぬゝめ紀表七紙の巻ゝ
廉の吗をれて

七紙の巻古之伝て書意のついゝまふ廉やゝゝん
古六日或人ふゝゝいれゝゝ湯の巻ふ切薬王山東
光寺みあゝゝ住伝ゝゝ不ゝれまれ形ゝあゝゝ

入湯記

ゝむ名雲やまいもゝゝにゝんゝゝ面和ゝ湯ゝゝ巻
紀伊路の坂上り小栗判官墓といふの見をゝんそそ
れゝゝ宿ゝ泊まゝ又才なゝときゝまて　本宮の湯社
ふゝまゝてゝおうゝゝ和歌ゝ伝社壇ゝゝ楼門回廊

拜殿より至るまて星霜おしふりし丹塗もまさしくふかき
て丹茅葺の仮を矢へるさまなるく神さびあり
いくふもあらさりやさらや三熊野乃山こゝ高紀神の光を
巴の渕みく
熊野川岩田音垂為あひて色こゝろこの渕を名付
廿七日舟ふのり新宮の方へくあり一に為ふ
そこくもろくこゝろこたりくこゝ乃たくこゝまいひとり
くすくはりくはりてさたくこゝろこれ浪れくこゝ唐
土の巫山峡もしらなれさふあはさしもををこゝ
因こゝ色くこゝ陸も形熊野川くこゝ訪ふこゝ乃く
さて一あ中に八熊波の高人日こゝ乃れ伴物糸奥乃
の渡り若さぬきれ熊野まこゝて乃ふこゝの乃御
を外因くこゝ乃人くこゝ教乃れこゝひこゝ乃はくこゝ

乃きけハ元も高こゝ乃ぬ変してこゝたひのこゝ乃こゝ或ハ乃ふ
くの因自慢又ハ先子先孫のことのこゝ誰乃こゝ人と
なれふひこゝ乃こゝ乃こゝ乃こ

奈倉祝人百一世の子孫何のそ見ふさとなるん日未乃時
ちりに新宮自信房ふ兵庫房二夜宿一古
九日のあしこうも晴ぬまハ沖社ふまうてて
三熊野の神社ふ為やちう浪も立のさうれまる淵ぬ面ふ
宴ちうしてう文淵濱の文補陀洛寺ろとゐし
濱伝ふ大石小石皆まゆうこのあしうはやこうあり
おりふり荒磯の波ふいつとちうかくこあをちうつ是
貪欲恚癡ハ海を放うく成り玉ふとと誠ろ武人
もあくこうあ兵飽まてて今しうをの影ふ世ちう
さんハふのとと心乃きすもふのうちうてう面うき形人濱
若こそも色うんの使ひ世ちうちれうおいろひすあ
つおう人もおりいうけさる事ふちうて世の人に対さを
は世ちうもむちうりさうはあうとかくさはとと白眼

みあう面世上の人ぬ見うく我ひとう清をといひ出ぬちう
ちふたもちうちう人あうもすくし神のうくも何ふふ
もひの色けあちう所に考くうひてさのく家くれつを
面てとしておうう姿もあはさうくすやちうあう
まはしおうくち世のちましき波風ふもあハさ
うハ厭離穢土の見ハもろくふのとおちてまろく
無為ふ成に使もろう所へしさひくおまうふ世の
波風ふもなれるとおとおり面ろひ浴をあうぬ
くうちうのれ面くしふとのもひうれんのうらん人ち
自然ふ入りうちうをとりちいて人とまいりをも面
ち独居しうくふをを面ひんうれ使しうう人れ
ひう縁ふ云うれうくうつりやちれりのうれと自面を
形くはくしはをちうくハ者をあやまりさとおは

ゐへ一生を九月桜樹に新やうに成へきさるを物さ
ゐをつて流れのごとくにやうやうに人のつと
大くに我すきさのむことをさうもなきものとの
おりものの法みくにあてゐをれハあくとなん
まくをあのいつをきをのまさをれとしいはれをの
をとれりとせんをるものもなしさるゆふく害あつのく
下さるなるものも人乃ハれ用ひさ国して他ハにさしを
をしへのちしこも成へしとはゆきくて
日日申時ちのうに那智山高勝院ゑ長月朔日
法華院先達ゆく滝山にのりさうし紀ゐは松の
祈ハいろくこのれくへハ法ひ如意輪の滝をゑ護摩
壇を拝し聖護院道ゐ親王のう勢ゐ法しし不
動堂ゆきて布引の滝といふをゑ花山法皇

こと勢住世ゐ法ひつゐ百日願を行おをゐ彼御製り
木の本ハ樹とをれををのつゐ花ゑ人とゐ如ゐ百ぐゐ
此ハ御て西乃法師の奇ゑ
木のもに住つゐ跡ハ人川ゐ
ハふしひぬゐとなとひあく
物ゆきて花こそ散ものの木のもにさうし法ひゐ滝ハ水上
ハ乃跡ゑ桜ハく根のゆおれり外に又清茶碗清茶
蕎いまくひり南龍院殿奇附し法して石の橋ゆ見ハ
おさゑ亜ゑ亜ゑ乃ゆ法ゆ
ゐくゐのくゐをれいいゐ海も滝ゆおちをひゐ見よ
をくゐ面叡ゐ測をて有をのゐ奇叡天ゐゐ
しゆをを扱滝の上ゐ乃ゐハゆくゐ乃ゆゐ
を五間をのゐくゐ面あゐのゆふひゐれハ七間

いるとさもあらぬへしと見るに眺望されて海上をに
浩々入江のうらゝ目の下はるゝ見やられて風景
面々たる三の滝はなんとせしうもいはの面より
こうきそしてうちくくかりくくと滝の本乃
拝殿より又ふあくまい
雲雀はうらゝ舞くあの上ハ心乃ちとくも形ちの滝つせ
二日晴のもの観音堂ゆく　亀山院御願殿の
御本尊観面ふる　弘安二年二月晦日　太上天皇初度　と刷刻し給
へる山ハ本尊ハ金ぐ箱ふ入たるときの仏し
渕へ入るつる奥殿もりくなる鈴掛山
くゆ化ふ掛頭白うふ鎖赤洞上ふ金の登龍乃垂
物ふるく御の袋ふ入るる
三日も風雨やまりしと人ハ寺やとりの時れを冒ハ

院を出るく雲母をはめ面ふ名言見顧鈴ゆく消るや
くつくはるる
さいえるして古々意しふの名乃ものを面ふる多ものを
日夜祈乃高はれ多ものを
面へとやハ高ふ北星ふたふきけハ表ものの衣打ふり
五日竹坊を出るく帰路ふ発心門王子ゆて
入しふ心を発ふ門なるハはもむ法ふ神も乃ゆけ
とな納しふ消るるれしも跡ふ祈ゆき念
佛ふつく家ふるれへあ人ふるハ苦労さ
ゆこ発ふるとしふしおりふれ不にて人おあの
ふ家ふ彩心乃ふ祝ふ法をひとふ面ふんふも
見ふ祝友祝免ふとふしこのといやとふ後初の西
きこふふ行ふ人の山ふはふかくし大くふ

[illegible]
やとされはあひやとりてあをうはそれいのちはも
さしろひしあめしきくはたふるにそそられう
はそされはふるをられさあふふばつけはいさくれ
ゆりこをはけくぐめらひのれんをんあ
をあとをくひつあはあめとのさるにかり
めへれ小石ほの中ふまはふひしば余不はるけうちう
ちのあにのるはれをはあてちもちまくあう
て迷ひつあをくあめそはをを治ひをるとしつて
ほををんくをふくを思ひをうめをんゞをを憐むの
つをはちくはほはのををひれふくをを
せんをくはとそ追つれくはひはこあるひめ動の上
世のをうれをまうくほりもそりめはあをやうふ

ふをしやをしをを拝ちるほ行者めそをあうをの
くあはをうるを者にをあのはりれめをけりふを所ふ
をうくをしををうるをはまいて哭れ人のをるる
人のふをはのあおはひのるをもをうはんこと
堂はるをはふはをれはをうひれはうもつ
れ底のこをれおいくはあをもをもひ人
ををうしをもあをあをはあいまし名くをれ
四あなをへきりの形ををうつ恥をおはいをし
まんと佛神をあきうをうををれはし心きあれ
しとはまをうしきをはんをを恥をし
れをそむをいをのそめはひまくをなをひあや
しをおあきをりのををのれをやをちをうれ
ををを毎あくそあをうをさはりをは毎のをを

こゝもとゝ、事さ、ゑ、ゑ振舞代もきうたといひ、
彼人の中ゝ、杖つきゝゝこゝろ息をつきて舟
も山路をこゝ教なゝゝゝといひ、ゝきて、ゝゝゝ
へさ皆人は知たちゝゝ雲あせわみと、生あり、れて、
皆く見ハ面白しさゝゝ又あせゝを知て代
一板はさ人ゝんゝものを、えいやくゝと、夢を、ゝ帆ゝり
あもゝく、はく杖の柏ゝハ岩角もまゝむゝゝに、
こゝろゝしゆきのゝりめ下さ面のゝさ居こゝも
ゝもこのゝとものはゝきひはれてんをゝのゝゝ世の
中小さ世振舞のゝりて山の清小茶屋あ角ゝ
ゝ悪しやゝゝふゝと、ゝ話ゝり人あ面くおつき来
居ゝ中にまゝにつき小ゝ下やゝに脂粉をゝゝさし
て自ら清粧の色はゝゝこのゝ見敬ありてゝゝ

いと細ゝ面ゝゝて物のゝゝこけゝゝゝゝゝと
ゝゝゝれゝゝ髪振乃ゝ世ひゝゝひゝゝゝ美なし紫
のゝゝゝきむ、ゝき、ひし衝平たやゝ小落雲深乃
袈裟袋えゝおもけゝ面ゝのゝゝゝゝゝ茶屋
あゝいとゝれしいゝゝれさくゝゝたやゝゝゝんも
のをとて茶ゝゝ香ゝゝゝゝゝゝゝゝゝおや平ゝ
老女いてゝ日の雪ゝゝゝゝゝ宿りゝゝん
秋の日乃雪彩ゝとゝゝゝゝゝ面面ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝ目をゝいめゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おろせしといふるる事ーろうきんかとうれたるを
枝めて愛めさうらもぬきやうのふしてはをあるましう
も誠の花の姿より白しそれをいつのあんもん泥
諸のおなみ内あもかるるるるるとふて樒
樒よ樒くといもれしにと付るとなんそ泥と
るるるしん人も弟末の樒を樒つちふ作りろせしやう
みいとおろるるうそ兄ふ人おほうるめざそしふるやと
らいしー人るるにおりのるるるひあるて波おや
免をろ人みしたたるるいのれるるるハお弥させ
弥ひしていい姫のるるるるるへとるるひをれて
花ハ弟おとむさと免みてさるるるひ志のいるるるえふし
るありるんいるをろ紀けるるる雑佛事をのるるみる
ていつしーのるるるひ作り弟んいるくの經よるるおほへ

佛事おるるるのをさと紀弟みひつるるる志うるるをきるを
しを稚さるる北也へりやるとるるひ世の人去ありさる弟
といひいき免るれるるひ世るるの弟のあれるるるりてるさ
の弟るるや電光朝露のるるるるるるるるるるるるるる老少不定生
息ハ入を待めるるるひ浪世こそ弟のりれるそ
弟小十三業そおのさるるるとるるりて今ひ十七
さみてさるるふとるるつ泡るるをれを生人もれ
おるをれみるり彼まるるさの広司る娘ハ同十三少
みるるいきるるる地とるるりしを苦悪の弟ひ
るるひあるるるへし

人のるるるとるるるるるのハあるるるるるるるるるるるるる

きゐ面ゆくさと誰も云れらゆなりされをきつゝハし紀
をきくこのとおりへときゝけるる事をきゝ名り誠さま
ゝひの根本こゝ面しきの色ゝ紀ていへと髪も
黒く顔ハ白く唇ハ赤きをとゝ名しとそ推るへく
それ赤白黒の色をきいの名りさゝなゝあゝ紀を
こめこも異のひゝ紀をこれむ人形しゝ白きをこめ
ゝとも髪の白きゝ紀こめむ人なし黒きゝ紀こめ名ゝも
顔の黒きをきいの黒人形しきみその色をゝ紀きの
むゝとおゝとゝ名の形こゝ名りぬきハ邪ゝ名ゝ名ゝ紀いゝも
きゝへゝもむゝしゝ名ゝ髪ハ白く顔も黒ゝ黒も赤くて
ゝ名ゝひれをゝ名れをゝ名しゝとゝ名ゝ名ハめ猿の名ゝ名ひゝ
く名ハめきゝもをのゝこゝもゝ人の白くはゝゝ名ゝ名ゝ
顔ゝもゝゝ名ハしこゝ名ゝハへし

船中ゝゝ形をゝ迎房の星ゝりゝやゝりゝ六日九朔
出ゝ時
旅衣かゝきゝ世ゝ人紀きゝ紀形年みはゝゝ名ゝ迎房の星
同日田ゝゝみゝ名ゝ時ゝゝ名ゝ紀煙面形ゝゝをゝて祇
諸所
煙面みゝゝあゝ旅のゝゝゝ人てかゝゝ面形の星ゝ旅ゝ
八日南面ゝ観世寺ゝ拝ひゝ詠ゝ名ゝしゝ
入おのゝ孫紀ゝゝみゝゝ紀ゝ名ゝ月ゝゝ不のめゝ
九日ゝゝゝゝゝ川日ゝ名ゝゝ邪ゝひゝゝおゝ時者
のゝゝハゝゝしゝゝゝゝ名ゝ名ゝてゝて名ゝ紀
ゝれゝ形ゝひゝもかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月日面
旅の恨ゝゝ人ゝ名ゝひゝあゝゝゝゝゝ
きゝゝ心のゝもゝゝ

梅さくらかきつばた藤など夜ふかくもまた折ふしの菊
二ツ三ツ四ツ他日の海一の浦はるゝ故園の四ツ人みさ
ゝの紙のうち地蔵寺ちかく見えるせいはもこゝあれ不ゝ
なれかさゝきみ乃舟の帆を掛りのこゝを人みな仙
てとはうもふゝうゝうゝ見へきれた
志帆引もこゝやうゝん乃みの四くともえ人ゝ乃ゝ乃の浦
志ゝくの浜を志ゝくゝ
吳浦の色ゝまの乃ゝをゝゝめ乃もゝれゝ志ゝ乃浜ゝ乃ゝ乃
塩こゝを北海み　宗神天皇御陵掛石少くゝ
あゝ
十日田迄を出ゝく茅ゝ乃ゝ乃ゝゝゝ

代和垂仮名を、然世俗年記の要に沛製其外
和歌あり
十三日の法とめ世俗を出家と物語時分紙の三十
日茅とゝふ物を、唐土せちゑの時まれしゝゝ
こゝろ〳〵おしをきられたるし
此法の師うんきろハうそう茅君うかゝゝの物茅孔法
又候おとゝ
又ゝの梅を繁らんへ江川波の哀れ高きを
在二首の四位とゝ哀れ高きを
このきをくも人ゝれ世をみおろす茅波此入江ゝ
ゝにはきこし代唐坂を高
見ゝ山ゝ物あり代唐坂を高
川ゝ行祖代者位俗をいつゝらい法ゝへゝ

そゝといひ名ゝ我八幡ゝ出ゝ西ゝ乃神社佛閣
ゝまゝて行ゝ代あゝ何ゝも四位ゝ八を
へてゝといきれを名ゝ社繁ゝ花の形
を出ゝ唐ゝ唐さゝ紀形ゝを波ゝ法者
男形ゝ代ゝおゝ俗ゝ
うゝは四ゝ紀ゝ
へゝゝ滅ゝ當代繁ゝ
を唐ゝ唐ゝ紀ゝ
の和ゝを西ゝ唐ゝ八ゝ時のゝを
紀ゝ
をゝ竹ゝ
あゝゝ行ゝ道ゝ
ゝ年代車をおゝ

名を人こハ以のあと勢を[illegible]ふ志られを彼車はそひ
世のなか年の車九なそう世思ひの家ハいつ出侍
しともきく　[illegible]ハさのこいう[illegible]ひろとこと
やうなのみ答しを学ふもいうる
と世の人語り伝し[illegible]れたおりし彼を学ふもいうる
所ハいの物さ毎しく以の物る人のをもんも世の中ハ
毎ちろくし為へしく叶ぞしとを車はそひ
まいのをもうを八者のあり物あり物
に源者遊民の所ちしうくあかとり物ちつを
都を為ろを云ることのいるあうちいるあというり
うれを所をはそひらして在上乃あ物毎世ろ家
を用物き所ろ天下のあを法ひやを益用れ
方あて下れ用をろ所道とそ方を法ひころし

こ世きうこちろ人をろん[illegible]ひろろ（ふかくおり人八年
百のたひまも我所ちろハ大物ろ世用をこ[illegible]
こめれを物ろ道あそもうれと為後をあろを
うこ法あ物ろ佛性ひろと物人自所をこう
れを風花雪月あ極ひころしこ心守大の
為あ東ふ及ふす

或人（利休）ものきうにさらじ[illegible]れ志やうを[illegible]祈れハ[illegible]心
をとひひ為又ある人こ[illegible]人乃ろ[illegible]而を才一
ちろ人しと為人為言[illegible]の[illegible]のをいふ
こひうつるあ笹の[illegible]物ちり来ふる心物ろ心
ろ人あはそうあさんろそ[illegible]ろしこうろ[illegible]れをやき
といつまの乃ふも為りろもしあんハうをひ
ろ人き今れ世に為ふをろ人をろハを風流あも

てれかしいつも飲食の業をなすと人のこころはかりしさもばかりの人なきこの年ごろ海ちかいそなれはころそなてたかはなのはるとは上中下の家々まちまちにくらひとまとしかしたてたるこころ人はもれかたくあるべく

煩悩を断ずる法は智恵煩悩は塵ずしてしかも智恵は幕のごとし煩悩を断ずる法は大智恵をもつて煩悩は断しつつ色しかも智恵はたとへば大海のごとくなれども智恵をもつて煩悩をたとへば蓮をもつてこれを蓮のつきしかも幕をもつてさまたげるこころを用ゆるをもつてはいまだ蓮いまだ幕をもつてはこれをもつて幕を外へうつしてしかもこれをもつてこれをもつてこれをもつて色をもれ黙成居士ろ磨鏡帖に言く讀書者将以治心養性如用藥以磨鏡也若積藥鏡上而不加磨治未必不及爲鏡

累ヲ

人は珍を食するとりとも一度味ひて後ろをしらしまつるかはたむ人いまこれあるしかるに学文修行も少くて玄味の深長なるをしらしなしたとへはそれはあるかはひとり性心をあ経も月をうるとも中ひのこころ乃後りこうさほりはまは部ろ所はろやまおえたるさとくこもるこの形ろ食物も調しやうれひやうあるく毒とろ学文も志やうあるく心のやうとなろ魔障はしかしこれを成はしかしを流さるも必ずふさはさるるこころにしるれ

或僧坊に宿りに一文不知の入道あるく

後欲深くに他事なく念佛ばかり専修専念に住居ふかくきを
八重とをのくさしはこころえられてさしてまとくこれ
事ふかん家業中のおとをかとしてしかし寝云おいて
少々ちかしこれを学ぶおのおのえん

軟家の人々いつまでも諸願を改
勢人時のうちにこれ諸願とかくこれ只念仏さま
模さまもしてきはこれ正邪さまさまに白ふ欲ちうこれ出し邪法をして正邪を推し
強くこれ志わるく家正邪をえんとさ居ことをうる
先又正邪のやうくなりそのおいこれとを拘よ
毎日自我ふまわせてむうの欲乃つく順しく家正
邪をとすうる毎しさされこれうちうこうさしてもむう
欲乃邪邪自滅の理あるくものちうふそのの

つうまく邪ちうこれわるく邪をもふくむへうす邪正一
如と觀さへしふ玉拾ふ事ふりちく
強く毎し

斂術ハこうふこれひとくむう時太刀乃あひくこれ
家の内うさはるのこ没さうふさる毎しこれ乃
の正邪ふこれおれとこれ邪へしこれを殺していく毎これ
此理なし毎これ志のこれ乃ハ二つうなうちん
ともに毎こうハすれさんこう欲の毎いを拾へもこれ殺
只ひとうこうこへしふ毎りて業の労まうこうあうさの
ありこうこれをこれるこうこうこれもおうまくこを
上のとさされさ強ふくこれハこうこのいこう
しこう邪理あうこへしこ怠死生の拾りめへこれ諸願
をあこうこう時のうこうこうこうこうこうこうこうこ

王羲之人の書ハ必せりちくいんをいまくめるの如く丈夫北叟術師のとうん自他を忘てゐハ志ろ
しゝ大字ハ小字のかゝめく書面て小字ハ大字乃ハ
みてこうく面しさみゝ字形をかゝみこうくゝゝ唯筆法
をつとさへし繪をこうさ面に書を北弦ひう絃り
樂ハ吹さうゝ示み面極の律呂あり奇を以めこせし
面み俗情浪を絃しと絃笛み楽能ちう人乃曰唯樂
を毀譽絃ゝゝ示れゝ吹へし皆人大形
息ゝ吹ゝ吹ゝ吹ゝ吹ゝ吹ゝ吹ゝ吹ゝ吹
を絃和ゝを絃ゝ絃ゝ絃ゝ絃ゝ絃ゝ絃ゝ絃
心みゝ吹ゝ吹ゝ吹ハ年絃物面ゝ絃ゝ絃ゝ絃
ゝ吹へし碁ハ諸員をかとせた唯正乃みおく
自他と打諸を紀碁とた免つゝし紀みを抜と

好へゝを紀と所ゝし菊の花を紀ゝ作る人に菊
の書ひやゝハ誰ちゝ相伴あゝしとこゝ紀を
ゝ紀と菊ゝ紀へゝゝゝゝ紀れみのハ紀絃
ちゝしゝさん何みても志実ハを紀志のゝめまハ
をみゝのゝをみつゝをゝへをゝ世ゝゝ紀
しゝを紀

菊ハ人のゝみちゝこゝ紀今紀てむゝの限逸を
ゝゝゝを抜ゝ吟みゝゝも今ゝ面ゝ書ゝゝゝゝ
ゝ紀ゝゝゝゝゝゝゝゝ或人面世紀
世ゝむゝに世快ハゝゝ快ゝゝ志川みゝ書面
と志抜ゝ志ゝおゝ
十三夜ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝし秋乃ゝ年のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

日数経て中尊寺に佛菩薩を礼拝し奉る。月はなれて新しきや雨ふりつゝぬるやうにて
ゆくいにしへ紀

今宵は月をそなたにうつす雨の音愛もてつる海浜の光ふ

十日夜吹上の浜社に参詣して

元八幡社のあるしを吹上の神乃ゆゑも月ふるもむかし

十五日宿は出て根来（ねごろ）へまゐて粉川寺に泊る。

十二日雨ふりて山坊を出て菖蒲城に泊る。

余は雲八記ふ雲八記ふ月ふる雨ふる菖蒲の山

時果て松うゑ松ふるとても秋の山路八月さえやは

沖はの浪つきぬ波風の音もきこえ（ぬ）

月新たにふる沖はの浪千鳥詠みむしをあはれみ

神無月二日午後山の紅葉をみて

元禄辛巳ふる年後山ふる山乃もちて

日日徒歩出て高野山に詣る時

名のみして高野浪八波風の音もきこえぬ月の影ふる

紀路の山〻はなつかしうふる

時めき都をたちて紀伊国衣紀の路の山もたゝみうるまて

信田乃杜を

夢乃葉ふる杜せめて乃ふしらう信田の杜乃千枝九重の

住吉海社を拝して

云乃葉の浦ハとこハ住吉の松乃ゆゑ

波路遠をこゑて住吉の松乃枝を見てるうら風

袖ぬれし雨を波路ふる波路遠ふる雨の海つら

雅波ゆえ述懐

かうろ丸と世にいふ所もとしあのろ丸ハ人の迷ふおろかさ
六日井本亭にて菊花海辺時雨
難波江や芦の根葉を吹時ふきわかぬ沖は霧
七日江口の旧跡をたづね
云の葉乃ゝの屋ゝも跡絶て江口の里ゝのこる古寺
月夜深草の里に宿し八日発出る時
世世八路の庵者哀れて名のみこゝろ和泉茅の里
五月雨の日ゝ命ふ所ひとりくらしし多
武峯地生院主初秋の比風ゝ人の絶
れたる山ゝ初秋の花和歌の中宿せんと思し
事ゝ思ひ出て
花和歌契りゝ初梅に沖ゝ人の所も忘れ
元清の比ゝ

えし冨士岩伝さゝ海ゝ来ゝ
ひろ和ゝるゝ山ゝをみ名ゝ
ゝ紙えゝ筆ゝ上逢部殿上人やむをゝ
海方ゝ禁門沖瀑乃ゝ
なを哀いと申ゝにゝん
八日浴外の茅菴ゝ行節をこゝ名ゝ

雅俗竹濃賦韻

凡竹乃別類六十八種分類辰乃日数与一己或之五月十三日ともいふ竹の字形あかるくまろく竹を生竹をさし俗にせり又あるいは竹をまつかるこの内へ竹の姿にたとへやすくまつかるこの内へ竹の姿にたとへやすくまつかるこの内へ竹の姿にたとへやすく

心をあらハ法西はなるふらく霰はゆみ奇也茅の
あるこ嘉乃ゆへ始く少しくいさ紀く細こゆく
しらこうハ一跡寝法晴雨みしあこのひ吋ふはを
つはいとくるる毛しつる毛一晋乃七賢二唐の六逸
皆見を毛世り抜の要をいへも花蘇五湖ゑ竿さ
子陵乾坤を舒巻を水通ひく筧ふ必はを面しに
数ゆく編戸はあくるこのとひやしむ爆竹こあを
さを竹葉くまへを子多竹茹熟はをくしを
竹瀝疫をきくすす筆とちりをちはを古今を志ろし
管とちりくを律呂あきやうろ年あてとなを
硯箱ゆくちをあへとなる管はを製をるり赤
はは笛笛を吹く穀を生はを笛乃ふはゆく鳳笙
龍笛箪篥唐籥天八ゆきりを外吹和家祇と

以数を志くはは漢竹ちいるもさを也和竹をまふの古
宅は大同竹世り見を嘗はを多はは笛はいく
笛計茅の吸笛吹笛ゆにしへ乃賜のをくまは笛
今やはは煙くあてとちをくふ敵を物せきう茅
とちりくを悪魔はも海伏は茅筒鉄炮乃薬筒
火縄ゆくち筒竹力志こうく杖竹やをとる鉄中ふも
文跙乃竹性ゆきてつくしこのりく虎をさすに
毒氣はるくゆ怠死を志をいつを又薩塩をよりをお不
むゆはは竹く掛をくせ拾はひくはわに沸鉄を虎にを
をあくへさせ拾しを伝ゆふも涙こを免かくし
ゆをくく筒くうをつは紀竹くく筒くうくさうや紀
竹布はらゆは竹筒くをあを引ふくまをく急雨
を海しく筒く茅はあくへをるく花火はを

ろう、また武門水火乃術あるをかなしへ、こは冊と
ろう筏ゆをなりてハ人をとの世樹とろうてハ又人をと
こは字地をあをろうく火学ハ火の文化ハ志ろうことろうて
ろ疑ハ志くへり扇とろうく陽を生し串となるを
あハ法ゆくいの陽ろとハ物ろく大文を法きちく
ちんとなりてやうもを照こは自主をろうて答
ハハのまし火吹ゆをろうく面ハまち炭を紅
あハ炭屋茶せん茶ろし茶ゆをしくを花筒
竜胆行茶竹燻とろる炭くまし竹くさうくく京
ハハ文ハ沐茶しく色ハ竹ハ面ハとく
竹当者ともゆ足竹如意竹箕竹排竹柱杖竹
元年校を制命志彩を多海乃一義延朗
九一年元政塚頭の三等竹ごろくにおとひはハ

へしあむく籠を法く彩ろ面くこさまくあ
むさくを面ろを後府あを馬名を法く志ろ
女ろゆをふあくろをしんて楠ハ面くこ元きく
かへを法く志簪あかるをてこひゆくなろ床をて
ろく水ゆきとろれろ籬とし茶植のを
ろもゆしまく見ハ中に祝をとこは猪男昭
して祝をとゆろ博とろ彩或ををゆ
をふくにろをしまをたをきくろ人海とし
ろうしゆそ法芝ハ茶ゆ面ゆきこはちつをを可考ちつををすの
こをいいかくろ面ろき柱宮かくし清ゆ榻ゆす
坐ろくまくら松ろや彩き籠ともなろう見を国
小変しくを面ゆとくハ竹夫人ともゆをを志ゆ
とろをと紙とろを布とろをと箱ころうさじころう

うこの紀とかるを髮ゐけとかろ宗とかろ宗とかろ宗
こいとの彩筆と彩をくハをめつ為葉をきらめ
墓原とかろてを又見ぬこるを吉野筆ゐハ爪とかろ
瑞雲ろを脚竹とかるを蒲書を彩ふ字きしとし
又ハ小忘衣ふもをを笹竹乃大宮人ともはくをろ
竹柳脇をさうへ竹輿ゐくとやゐも武者をく竿とし
雅子馬出ぬ小童竿を面をきゆゐくうめをた
とし田支竿ぬをいを面ゐ稲をうをこをきし
をろうぬををのきをしをを上ニ末の葉うを
をくまん吟をとろしつ(りろ赤いしとかを
てをを免きゐををくしかはとかろ衣桁と
をろを竿師をはをくゐぬうろ或ハ酒旗と
なを又筆ろうふきろて架彩の中ををきゐを

蚕人の綱引竿爲さし竿をこ爲こを爲筒早漕
ゐ代やをと彩を濁江ゐ代はおこのきとを彩世外侍侍
教生ゐ具ゐをくををしをつきゐもゐくま
しくををゐりしつまろうの紀とろをまり竿とを
をきろゐをとをろ赤のう彩を素更へ雨竿道の
彩祝ををろを水北淀深をこんくゐ日乃さしのゐる
彩筆竿とをうをへ爲ろ筒管をこをを天ををうゐ
ををを徒名を紀具物を吉野 勅作の御父臺爲
麻まんをを北独見彩をくを乃筆箭ふ更ゐ又打に
周ふくきのふゐををるを中ふもをを紀をつをきのをを
こをこくをもるのめくき八悔の竹彩ゐをくれをを
紀論多乃簾室り悟人をを海屋乃十簾ゐ
長麥彩かををゐむを刑新竹を面ををを塀

をこえ敵の雑兵のまてらり今の世も能術をうを
れいこもうつ見をあらうとにこの外あそびのうち
志ゝ面をら一行さてらかくれはき等
こきりこの二ツ乃竹曲鞠曲徐曲おいま等めくら近見を
もちひをとりをれしとろんどゝ流おいに行あを
おほいちるを一節小一解さきし紀ろ数平狂
うもくく楊槌り作を又ゝ室山乃行ハごうきふ
つうりもうをを数等面をこてを乃をくむに
はをへをもうを紙をおふきを擂粉しあさを
ろうをを紀能ゝ面くしを巻さしとなり面は
準縄り使りをを巻ひをめせむ糸ゝり車代
外竹乃数くあゝ帰後をくをふくうを
をくを見ゝ面しあゝろごしゝのゝろ屏風ゝ

しゝ紙笠さしゝ巻さうかさすを笠乃骨ふもろうつへし
行くゝ事をきし香舎ゝ月札ゝ筒かゝをこ考をし
面さし戻をしうゝをひをこしゝ面てゝも車めう
香ゝ竹心あうゝ乃考をはつむゝ仏かを紙奇ろう
とを志のゝろうをを見も亦笠につくゝを冠ゝはく
をくつゝ作ををを巻ゝ羽節の布紙つゝ印
書をを見ををれを巻乃葉れうやま巻の志乃やさ
さ面くうをし家ゝといへをいうやさし文角竹文
名乃をさゝ行くゝ中考作切をハの筒粥祝き大ぬき
ゝ面ひうんを紀也たうを神代ゝをあ紀之
ををつくおうの緒紙面ゝ紙ひしをを今もを
面免し絶さうへし作をきうく枝ろうを表山
路ゝ引出をを猛獣乃面ゝひあくうをはを

竹の子耳ゐとして雷小鼓をきちうちうして庶を
うつ乾食されハ臑を利し氣ばくし疾
ばし化し熟ば消し胃ばさきるやうに見に蛍を
いまてくるゑ徳ハ玲瓏ちくさ拾ちうさきちう玉版琅
玕といひしもさとハりあるもむし碗碗見をむく
名おとゝ孟宗の孝寇準の信これらあるハまてう
孟宗のこうを孝子乃筍ばば供せしを郭璞劉殷千同
劉虚沉如孫ともうちうをふうれうし要竹文
与可蘇子瞻坡ちひ繫竹和雨をさちうしむ百天
の竿影小一歩をさてむとも以ゑ竹乃加竹湾竹
生寄竹の円紙彼ゑの竹田乖北業心竹の下道老
う竹ばあるとおうちうみ竹ばばうう美國ちも竹
をちうちう小兒男ばばし乃をゑれハ筍繕見に

新さゝ神ゑ筍男あるゝ文内々ゐ面
うゑ如文字清少納云ゐ尚話通照ゐ千毎の坂ちと
雅俗のさとえうもせば美俗乃つれしちゐきま
へゝこのくいひまてゆゝはいつまちも異竹の世こう
数そひとゝゐきうちうるへ
をちうちう去免猿ばもちし人を刑を去ゐ伏を
と枝ゆちうちうハ都ゝ老を毒ちうれ見に毒
すをちうれてそのうちも芳雅の花小分以をあうし
れ月ゝ蒲さとし素姫ゝのゝ害ば智乃瀧ば瀧
陽の海色和ゐの淘梅世外ば見れううばこうく
ばゑゆちうく都小陶ちうを
たうう本ゆ真されゆゝ
にはまくさを俗ば脱しく見
ばくく丈夫の爵をもう

ゝ年さ[illegible]冊[illegible]ゝとあらゝ志耳ゝ志ゝ

享保七壬寅年神無月